



いい足助 じゃん!

～あかりのつながる ^{あすけ}足助の町並みと暮らし～



04 第1章 重伝建地区選定から10年をふりかえって

～昔・今・未来 足助の町並み座談会～

10 第2章 足助の町並みに「住む」魅力とは?

～足助を暮らし楽しむ家族のストーリー～

12 ケース1：太田さん ご一家(足助町 本町) / ケース2：廣瀬さん ご一家(足助町 西町)

24



足助の住民だから知っている、ここにしかない 魅力的なモノたち

28 ケース3：横地さん ご一家(足助町 西町) / ケース4：三宅さん ご一家(足助町 新町)

40



持ち続けた一流のプロ意識。足助最後の芸者、後藤さんの歩んできた道

44 ケース5：鳥居さん ご一家(足助町 田町) / ケース6：成瀬さん ご一家(足助町 田町)

56 第3章 豊田市足助「重伝建地区選定10周年事業」でしてきたこと

58 [第1節] そもそも、「重伝建」って何ですか?

62 [第2節] 足助の良いところを「デザイン」する ～キャッチコピー・ロゴマーク・ポスターを制作する～

66 [第3節] 足助の良いところを「観光」にする ～ローカルツアーを企画する～

68 [第4節] 足助の良いところを「発信」する ～記事を書いて、本を出す～

70 [第5節] 足助の町並みが「学び」になる ～足助小学校が取り組んできた、足助の町並み学習～

74 [第6節] 足助の町並みを知り、地域の課題に向き合う ～実行委員が話しあってきたこと～

76 第4章 実行委員12名の思い

80 第5章 足助の重伝建 [資料編]

88 これからの足助の町並みの未来に向けて ～豊田市足助 重伝建地区選定10周年事業 支援員の思い～



「なぜ、こんなところに?」
そう、ここは足助の町並み。
昭和50年代頃から、住民と行政が一丸となって、
保存に取り組んできたこの町並みには、いまでも、
江戸時代後期から明治時代に建てられた家屋が数多く残っています。
こうした古くからある全国各地の風情ある町並みは、
都市開発や後継者不足などを理由に、近年、少しずつ姿を消しています。
何百年という歴史を積み重ねてきたなかで、
多くの人々の葛藤と努力によっていまも残る、足助の町並み。
この足助の町並みの未来は、これからどうなっていくのでしょうか?
それは、いま、偶然にもこの本を手にとってくれた、
あなたの手にかかっているのかもしれない。
これまで、足助の町並みを守り続けてきてくれた方々に、感謝を。
そして、初めてお会いする方々へ。足助の町並みへ、ようこそ!

ようこそ、足助の町並みへ

名古屋や岡崎などの都市部から信州・長野方面へ向かって山あいを進むと、
突如として、風情ある町が現れます。





足助の町並み 座談会

重伝建地区選定から 10年をふりかえって



動画はこちら

足助の町並みが重要伝統的建造物群保存地区(重伝建)に選定されて10年。重伝建選定時から足助に色濃く関わっている名古屋市立大学の溝口さん。足助観光協会会長として、足助のために尽力している田口さん。足助小学校で足助の町並みを使った学習に取り組む堀部さん。座談会の会場となったマンリン書店蔵の中ギャラリーの深見さん。それぞれ異なる立場で、この10年間、継続して足助の町並みに関わってきた4名。足助の町並みのこれまでのふりかえりと、これからの展望について、それぞれの想いを語りあった。



堀部篤樹さん

建築ワークショップ／椋山女学国大学ほか非常勤講師
一級建築士／足助町並みサポーター
重伝建選定後、足助小学校を中心に足助の町並みを活かした学習の講師を務めている。また、大学生の足助町並みサポーターらと足助の町並みで活動を行うなど、様々な手法で足助の町並みの良さを活かした取り組みを続けている。

溝口正人さん

名古屋市立大学 芸術工学研究科建築都市領域 教授
豊田市伝統的建造物群保存地区保存審議会 副会長
重伝建選定前の調査時より、足助の町並みに深く関わっている。足助以外にも、様々な重伝建地区の相談役を担っている。

田口敏男さん

豊田市足助観光協会 会長
豊田市伝統的建造物群保存地区保存審議会 委員
足助まちづくり推進協議会足助町並み景観相談会 会長
父の田口金八氏の時代から、足助の町並み保存に縁があり、重伝建選定後の10年間、足助の町並みの景観を守る立場で尽力している。

深見富紗子さん

マンリン書店・蔵の中ギャラリー主宰／和紙工芸作家
父親から受け継いだ江戸時代の土蔵を活用した、書店、カフェ、ギャラリーなどの機能をもつ店舗を足助の町並み内にて営む。昭和50年代の町並み保存運動の頃から、文化的な活動を継続している深見姉妹の元には、日々、全国各地から訪れる人々がいる。



本日はお集りいただきありがとうございます。最初に簡単な自己紹介と、足助との関わりを教えてください。

溝口正人さん(以下・溝口) 溝口と申

します。名古屋市立大学で教鞭を取っております。私が最初に足助の重伝建に関わったのは、2007年(平成19年)からになります。当時、足助町が豊田市と合併して町並み保存の取り組みに再スタートを切ろうとしていた頃です。それ以来、国の重伝建選定や町並み保存で足助に関わっています。

堀部篤樹さん(以下・堀部) 堀部で

す。いつも「ほりべつち」の愛称でやっています。元々、建築設計事務所働いていました。今は学校や図書館など、公共施設を作るときに利用者の意見

を設計に届けるためのワークショップや、こどもたちに建築やまちづくりを伝える仕事をしています。足助との関わりは、重伝建選定直後に紙屋旧鈴木家住宅の調査をお手伝いするために来たのがスタートです。そのときに足助の町並みを使ってこどもたちに授業をしてくれないかという話がありました。足助小学校で授業をやるようになりました。

田口敏男さん(以下・田口) 足助観

光協会の田口と申します。10年前まではガソリン屋で、足助には何の興味もなかった人間が、今では足助をなんとかしなければいけないと一生懸命動いているところです。正直に言って、重伝建とは全然関わっていませんでした。親父(田口金八氏)が関わっていたので。

溝口 伝説のお父さんですね。

深見富紗子さん(以下・深見) 田口

さんのお父さんのことは私が説明しましょうか。深見です。ここ(マンリン書店・蔵の中ギャラリー)の持ち主です。50年位前から、足助の町並み保存を見てきています。観光カリスマの小澤庄一さんと田口さんのお父さんと私とで動いていた時期がありました。その頃、息子さんは一切関係ないと行って入らなかつたけれども、やっぱり血筋を引いているから、今は一番頼みの綱としています。田口さんのお父さんは凄かったですよ。豪快だし、足助の人たちを動かすために小澤さんも頼りにしていました。全国町並みゼミ(1978年(昭和53年)に第1回全国町並みゼミを足助と有松で共催)でも中心的な人物でした。





マンリン書店・蔵の中ギャラリー

もつと重点的に町並みのことを学んでおり、こどもたちから町並みに対して提案をしていきたいと先生方もおっしゃってくださいています。

重伝建選定から10年を振り返ってみてどうですか？

田口 重伝建選定から10年経ち、約30件の家や塀などを直してきたという実績がある。放置しておいたら間違いなく壊れていた。重伝建のおかげで足助の町は滅びずに済んでいると思う。これから私の一番の悩みは、家は残るけれど家が残らない。紙屋旧鈴木家もファミリーが残っていない。田口家も残りません。家を残すだけで本当にいいのかなど。



深見 家を誰が引き継いで行くかと言うと、やっぱり意志を持った人に入っ
て欲しいと思うわけ。そこが問題。

堀部 その家の話は、田口家じゃなくても、例えば器の中に、堀部家が入って
も良いのですか？溝口家でも良いです
けど。

田口 そういうふうには、家が移り変わって行けば良いのですよ。足助という町は入れ替わりしておった町です。あれだけよく喧嘩した親父ですけど「家、ちゅうのは、住んではじめて家だし、住んでくれておらんと町とは言えん。ほいだで、見世物のような伝建の町並みを作つてもしょうがない。店の裏の方へ行けば家族の声が聞こえるというのがあって、はじめて家だから」というのは、良いこと言つたなど記憶に残っています。

溝口 昔、先輩研究者と「町並みが死ぬときはいつですかね」という議論をしたことがあります。そしたら「溝口くんそれはね、祭りが無くなる時だよ」と言われました。足助のお祭りを調査させていただいたんですけど、足助の男は祭りのために1年生きているみたいなどころがありますよね。外に出ている、祭りのときには帰つて来ますし、祭りがまだ強固にあるから足助のコミュニティは希望がある。足助がダメになるなら、他のまちの重伝建は全部ダメになるのではないしょうか。

堀部 学生時代に伊賀上野に関わっていたので、だんじり祭りとか、鬼行列

田口 「足助の町並みを守る会」ができたのが、1975年(昭和50年)です(有志30人で発足 会長…田口金八氏)。親父は、家のことも顧みずにやっておりましてので「馬鹿なことをやつとるな」と言つていた方でした。私は中学を卒業してから足助を離れましたが、やつぱりバスの中から飯盛山の姿を見ると「ああ、足助に帰つて来たな」という思いに駆られました。だんだん、何とか足助を残して行こうという気になつてきて、せめて孫の時代まではなんとかこの町が残つてくれないかということ
で、今動いています。石川啄木が言っているように「ふるさとの山はありがたきかな」という気持ちです。

溝口 足助町時代の1978年(昭和53年)に報告書が出て、そこから重伝建を目指したけれども「巨保留になつた」という経緯があります。

足助の場合は平成の大合併を経て、あらためて豊田市として取り組んで行くことということで2011年(平成23年)の選定に至った。住民の思いが、世代を超えてうまくバトンタッチできて、新たに体制を立て直して、重伝建の選定にまでこぎつけたのが足助なのかなつていうふうにも思っています。私はその頃の数年間、色濃く関わらせていただきました。

田口 早い話、足助町の時代は重伝建になる資金がなかったと思う。豊田市



なども見えていて、おもしろいなと思つていたので「祭りつてこんな地域の色々なものをつなげているんだ」と思つたのは足助の祭りでした。

田口 今、足助に残つておる男は、祭りがやりたくて残つておるようなものだ。

重伝建制度についてこうなつた方が良いという改善点はありますか？

深見 私は全国町並みゼミで「ちよつとした修繕」ということに関して何か提案はないですか」と聞いたことがあります。みんなが悩んでいるところです。

溝口 文化庁の修理は、根本的に全部やりなおすときに補助金が出るのでそこまで待つてくださいますよ、ということになる。他地区では、自治体で補助要綱を別に作つているところもあるので、豊田市でもよりきめ細やかな修理の補助の制度を考えていかなければいけない

に合併しなかったら、おそらく重伝建の選定を受けてなかった。他のまちで重伝建に住んでいる人に、豊田市は8割の補助金が出ると言うてびつくりします。「さすが豊田市だな」と言う。

溝口 重伝建の修理事業は国だけではなく地方自治体も負担しなければならぬ。豊田市内ではこれだけ魅力のある町並みなので重点的にとなつたのだと思います。足助の建物は立派で、研究者の間でも外観から判断すると「あれは明治の町並みでしょ」と捉えていましたが、調査すると、ほとんどが江戸時代の建物でした。江戸時代にそれだけの財力があつた。一方で、それを受け継いで直そうと思うと、大変なお金がかかるので、住民だけの負担ではなかなか維持しきれない。世代も変わつて来てそろそろ直さなきゃいけないという時期に、重伝建の選択肢もあるというところで決断をされた。堀部さんは、ワークショップをやられているので、小学生へ受け継ぐということについて伺いたいのですけれども。

堀部 足助小学校で授業をやりはじめて今年で9年目です。当時6年生の子が21歳になつていたので、次の展開になつてきたなと思つています。各学年の学習課題に合わせて年間スケジュールの中に組み込んでもらつていて、2年生はクイズ形式のスタンプラリー、4年生は防災について。6年生は総合学習で

のかもしれない。

田口 お祭りのときに山車が巡行する範囲は建築物に手を入れるときには全て景観相談会をやる。しかし、重伝建の4町(西町・新町・本町・田町)は補助金が出るが、景観地区の3町(松栄町・宮町・親王町)は色々言われるだけで補助金が出ない。相談を受ける側も住民でやつておるのだけれども、これは辛いところがある。足助7町で一緒になんとかしようと思つて、つくりを考えるときに「体感が無くなつてしまう」。

溝口 コアな重伝建は補助が出るが、周辺の景観地区は補助が出ないというのは、バランスが悪いですよ。





**こどもたちに足助の町並みを
これからどう伝えて行きたい
ですか。**

堀部 重伝建の町並みに限らず、地域の宝を楽しみながら知って欲しいです。足助だけではなく、日本の宝ですので豊田市の子もつとこに來なければいけない。足助屋敷は本当に凄く良い施設で、40年程前に凄く発想で作ったなと思います。県内各地の小学校が来ているので、足助の町並みにも引っぱり込んで知って欲しいです。足助の人って、キヤラの濃い人が多いですよ。そういう人たちのことも伝えたいです。町並みが残って来たのは人の力なので、変な人が多いですけどね。

助に来ると小学生が必ず我々に「こんにちは」と声をかけてくれます。こういう、声がけをし合うようなコミュニティで育っているこどもたちをターゲットにして魅力を伝えていただく。小さい頃からの意識付けが将来どのように展開するのかわかりませんが、私は歴史屋ですので50年位の長いスパンで見ると、そういう取り組みが続けていくしかないという感じがします。

田口 香風溪の100年先を考えて色々やっていますが、町も100年先を考えてやる。容易いことではないので突き進むしかない。秋は観光客が48万人来ます。しかし、目的を持った人を呼んだ方が足助のファンが増える。御朱印めぐりの募集をやる100人が30分でもいいになります。松平と足助



溝口 いやいや、足助はとっても気持ちが良いですよ。今でも覚えているのですが、調査をしていたら、両口屋の佐久間さんが横の道へ僕を引き入れて「俺は先生が言っている町並み保存はちよつと違うと思うよ」と意見され、とても頼もしく感じました。大学の先生でも奉らない。他の町並みではそういうこととはない。同じ土俵で議論をしようという足助の関係を私は愛しています。個性が強いので、良い意味で変な人が多いんですけど。

**次の10年に向け、足助の町並み
に対してどのような思いをお
持ちでしょうか。**

溝口 当時、町並み保存を住民参加でやっていただけなのは、足助が頭抜けていました。選定時の豊田市の補助金上限は、他のまちの重伝建の6倍〜8倍に設定されている。制度設計としてそれだけの決断をした。一方、住民に「俺たちの町は俺たちが決める」という強い思いがあつて、行政主導ではなく基本的に住民が決めるという体制にしている。今後、若い子たちにそういう制度で町並みができているということが伝わって欲しいと思っています。後継者がいるかと言うと必ずしも安穩としていられる状況ではありません。足

をつなく御朱印ツアーもやりました。飯盛山から真弓山に歩く城めぐりイベントも人気でした。足助七城も整備されていないところを整備して、歴史・文化をテーマとした観光地づくりをやるうと思っています。

堀部 紙屋が色々なことを体験できる場になるといいですね。例えば、竜吐水(火消し道具)からどれくらい水が飛ぶのか見たいです。足助小学校の学習は、次の人に引き継いで行けるようにするのが重要だと思っていました。でも、足助の方々を見ると、キヤラの濃い人が長く関わるといふことも重要なのかなと考えたりもしています。今後は足助中学校や足助高校へもつなげて行けたら最高ですね。

深見 10年先つて言われると難しいけど、私は少なくとも5年先までは自力で毅然とやっていくしかないと思つている。ここが閉められた形を想像すると「町が死んじゃうなあ」と思つてから。後のことは、みなさんが考えてくれると思つて、ポジティブに未来はあると思つてやっています。堀部さんが言つたように、こどもさんたちが関わりあつてくれることも、いいかなつて思つて。

田口 そりゃあ、足助が一番嫌いな深見さんが、一番生懸命やつとるもんね。

深見 田口さんだつて、足助が嫌いな



だよ。足助愛憎だねつて言うけど、愛しているけど、憎しみもあるんだよ。

田口 俺、足助大嫌いだつたもん。それが、今は大好きなんだもん。

深見 だから、足助は本当にきれいな町ですよ、どう見ても。変化に富んだ町並みの動線なんて、素晴らしいよね。全国に画一化した町並みはあるけれど、足助の町並みの良さは他所にはない、いつでもそう思う。

堀部 自分が住んでいる町を、なかなかそんなふうに言えないですよ。

座談会を終えて

田口 今日は溝口先生と、同じ考えだと分かつてよかった。私も祭りが終わつたら、終わると思つています。

深見 分からないと思つけど、私の家は男の人がいないから、祭りのときは辛い立場。祭りつていうのは、だいたい男社会でね。そうでしょう山田さん。

座談会を見学していた重伝建地区選定10周年事業実行委員会の支援員を務める山田哲さん(以下：山田) 話して良いですか?「祭りが衰退すると、町も衰退する」と言われてやる気になりました。祭りの日だけでも良いから足助を出て行った人も集めてやろうというの



と、お母さんたちにお囃子をやつてもらおうとしています。お母さんが来れば、こどもも来るわけです。男社会だと言われていたけれども、女の子もこどもも惹きつけて、コロナが収まつたらなんとかしようと思つています。

堀部 うちの息子も関わらせてください。お祭りで提灯を持つて歩いている姿を見て「かっこいいな」つて言っていたので。

山田 お祭りだけでも来てくれれば違うね。イベントの機会に来てもらつて、土日だけでもこどもの声が聞こえる町にすれば良いのかなと思つて。

溝口 重伝建地区になつているところは、今日の深見さんのように女性が元気ですよ。お祭りの面でもどんどん女性も取り込んでやつていくと良いですね。



足助の町並みに「住む」魅力とは？

足助を暮らし楽しむ家族のストーリー



江戸時代から続く町家も建ち並ぶ、歴史ある足助の町並み。時代とともに、町並みに住む人々の暮らしは変わってきた。

今、足助の町並みでの暮らしを楽しむ6世帯の家族がいる。足助の町並みに「住む」魅力は何だろうか？それぞれの家族が、足助の町並みに住むことになったいきさつや暮らしぶり、足助に対する想いを、3名の実行委員が市民ライターとなって、お話を伺った。



13 横地さんご一家



11 太田さんご一家



14 三宅さんご一家



16 成瀬さんご一家



15 鳥居さんご一家



12 廣瀬さんご一家



昔の床暖房

神棚の
系びすさんと
大黒さん

★日々歴史に囲まれて暮らす住まい
「旅館三嶋館」の文字が読み取れるガラス戸を開け、ずっと奥まで続く土間に立つと、右手には昔のままの姿の帳場。立派な神棚には、いつからそこにあるのか、黒光りする、ゑびす様と大黒様。初めて見るのが、床に切られた格子の下に炭を入れて使う「床暖房」。
左手には、古い時計が壁にかけられ、生けら

足助の町並みはその昔「中馬街道（伊那街道）」の宿場町として栄えた場所。その町並みの半ばにある、1812年と刻まれた鬼瓦に守られた、大きな平入りの町家が太田吉朗さんよしろうご一家のご自宅だ。



動画はこちら



明治期の三嶋屋旅館

れた花に、そこに住む人のセンスを感じる、上品なしつらえのお座敷。そこには、まるで博物館の展示室のような空間が広がっている。
「大正から昭和にかけての、足助の町が大変にぎわっていた頃の話ですが、足助八幡さんの境内で、相撲の巡業なんかもあったそうです。その時には、大きな体のお相撲さんたちが大勢うちに泊まりました。また、この近くには劇場が

お気に入りの隠れ家風カフェ



直子さんは、足助の町並みの中にある、ちょっと隠れ家風のカフェがお気に入り。友人や職場の同僚をそこへ案内して、おいしいコーヒーとおしゃべりを楽しむそうだ。

「数ある足助の行事の中でも、春のお祭りが一番好きです。娘二人が参加して、お祭りを楽しんでいるのを見るのが楽しみです。毎年お祭りの日に、うちの前で写真を撮って、前の年と見比べたりして、こどもたちの成長を見られるのがとてもうれしいです」

あつて、そこで歌謡ショウが開かれると、そこへ出演する方たちがいらっしやうて、朝から発声練習する声が響きわたっていたそうですよ」と、吉朗さんのお母様の緑さん。

三嶋館が旅館だった当時のお話を聞いて意外だったのは、香嵐溪が観光地として全国的に有名になった頃には、三嶋館を宿泊先として利用する観光客の数はそれほど多くはなかったこと。足助を訪れる観光客のほとんどが自家用車や観光バスを利用し、日帰りとなったことがその理由だと緑さんは話してくれた。官公庁の忘・新年会や歓送迎会などの会場として利用されることが多かったそう。

昭和58年、吉朗さんが幼稚園児の頃、おじい様が亡くなられ、三嶋館は旅館業を廃業した。現在は、吉朗さん、奥様の直子さん、2人の娘さんの菜々恵さんと百恵さん、そして緑さんの5人が暮らしている。



年季の入った火鉢



春のお祭りの写真



「私が育った所と大きく違うのは、足助では近所に住む人たちだけでなく、町内を歩けば皆さんが声をかけてくれます。こどものことを知っていてくれる人もたくさんいて、安心だな、と思えることです」

吉朗さんと直子さんは、結婚した後、足助を離れて暮らしていた。「離れて」とはいつても、吉朗さんが、お祭りや、地元行事に参加しやすい、足助から近い所を選んで住んでいたそう。そして3年程経って、長女の菜々恵さんがこども園に入るタイミングで、足助に帰ることにした。この先ずっと暮らす場所として、足助を選んだ理由を、直子さんに伺った。

「足助のこども園や学校は、少人数で、こどもひとりひとりに先生たちの目が届くし、暖かい雰囲気があるというのが1番の理由でした。それから、わたし自身がそうだったように、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒の生活が、こどもの成長過程で大切なことだと思ったからです」また、直子さんは、足助に住んでみて、特に強く感じたことを話してくれた。

★地域の人の見守られて子育てできる

豊川市の出身で、今は豊田市内のこども園の保育師として働く直子さんに、足助の第一印象がどんなものだったのかを伺った。

「町並みで有名な観光地は他にもたくさんありますが、足助は、古い町並みがかなりの長さにわたって、ずっと軒を並べているのが素敵だな、と思いました。私が幼い頃、家族と遊びに来たことがあるあの有名な香嵐溪が、吉朗さんの自宅のすぐ近くにあるとわかった時は、ちょっとした驚きでした」



三嶋館



「足助の学校では、郷土について学ぶ機会も多く、子どもたちが自然と興味を持つようです。とてもありがたいことだと思います」と直子さんも言う。

★聖火に込めた足助への想い



太田さん宅の居間に、特注の台座に載った、聖火リレーのトーチが飾られている。昨年行われた東京オリンピックの聖火リレーで、菜々恵さんがこやかに手を振りながら走っているシーンがテレビで放送された。菜々恵さんが聖火ランナーに応募した際の志望動機に、「生まれ育った足助の良さを、もっとみんなに伝えていきたい」という思いが綴られていたのを、吉朗さんは、とてもうれしい気持ちで読んだそうだ。

★学校生活も習い事も充実



長女の菜々恵さんは、足助中学校2年生。ブラスバンド部に所属し、アルトサクスを担当している。4歳から始めたピアノのおけいこを今も続け、交流館の英語教室にも通っている。

「2年くらい前に、菜々恵が『三味線が弾いてみたい』、と言い始めたんです。そうしたら知り合いから三味線を借りることができ、別の知人がバチを用意してくれて。それを見た百恵が、『わたしは太鼓がやりたい』と。その時も、すぐに貸してくれる人が現れて、とんとん拍子に進みました。その時には、足助の人のつながりのありがたさを感じましたね」と、吉朗さんは言う。

足助地区には中学校は1校のみで、地区内にある10校の小学校を卒業した生徒が入学する。それまで、別の小学校に通っていた生徒が中学校で出会い、一気に同級生が増えるという、都市部にはない特色がある。足助中学校



★「こちらからも「好き」を増やして欲しい」



最後に吉朗さんに、「子どもたちに伝えていきたい足助の良さは何でしょう?」と伺った。「足助には香嵐渓という名所があり、歴史ある町並みもあります。これらはほかの地域の人たちに自慢できるものですし、だからこそ守っていく必要があります。僕が教えるとか、伝えるというのではなく、足助を好きで、大切に思っている人、守っていこうと思っている人がたくさんいる、ということを忘れずにいて欲しい、そういう人たちの話に耳を傾けて欲しい、そして、この先もずっと足助を好きでいて欲しい、と願っています」

「わたしはあのお店のお店の葛アイスが好き」「わたしは上用まんじゅう」「やっべのケーキも美味しい」「うん、美味しいよね」と、ひとしきり好きなものの談義に花を咲かせる女性陣の会話を、目を細めながら聞いていた吉朗さん。ご自身が生まれ育った町で、奥様や子どもたちが、たくさん「好き」を見つけたことをうれしく思っている、そんな表情が、とても印象的だった。

現在の2年生は全部で50人。男女問わず皆とても仲が良く、菜々恵さん宅にはよくお友達が訪ねて来て、つい最近も、広い家の中でかくれんぼをして遊んだそうだ。

次女の百恵さんは、体を動かすことが好きな足助小学校の5年生。5歳から通っているスイミング教室の1級を持っている。「僕が小学生の時は学校にプールがなくて、泳げない子も結構いました。今は立派なプールがあつて、この子達なんて、びっくりするくらい泳げますからね」と、吉朗さん。

菜々恵さん、百恵さん共に、学校の自慢は、「給食がおいしいこと!」と言う。足助中学校校内に給食センターがあり、調理師さんたちが、地元野菜などを使ったおいしいメニューを考えて作ってくれている。子どもたちが給食を楽しみにしているというのは、作る側にとっても、食べる子どもたちにとっても、ほんとうに幸せなことではないだろうか。



取材前々日に降った雪がうっすら残り、ひんやりとした空気を感じながらお宅に向かうと、玄関先に小さなかまくらが。こどもが作ったであろうとほっこりした気持ちで呼び鈴を鳴らすと、支真子さんが温かな笑顔で迎えてくれた。仕事、子育てなど足助での暮らしについて聞いてみた。

★足助で良かったことはいっぱいある

まずは仕事のことについて。お客さんの印象的な出来事を探ねると「いっぱいありますね。1、2時間かけても、うちまで来てくださるお客さんもいて。単純に包丁、はさみを研ぐというだけでも『わざわざ来てよかったわ』という言葉をいただけるとうれしい。それだけよかったと思えます。そんなんばっかです」と友門さん。地元のみでなく、市外県外からのお客さんも多いそう。

足助で商売や事業をしようと考える方へのアドバイスを聞くと「観光地なので香嵐溪もみじまつりのある11月だけのイメージで来られるとそれ以外はほぼ閑散期だよということ。最初には言うようにしています。店として魅力ある



足助で代々刃物店を営む廣瀬さんご一家。「足助のかじやさん」と言えば誰もが知るところ。ご主人の友門さん、奥様の支真子さん、長男の小学3年生桃治君、長女の小学1年生夏季ちゃん、友門さんのお母さん、おじいちゃん、おばあちゃんの7人家族だ。



営業形態だったり、内容だったり、発信をどうしていくかというようなことをまずは話すようにしています」。





★自然あり、人とのつながりありの町

共に足助出身というご夫婦。支真子さんが小学5年生の時に通っていた小学校が廃校となり足助小学校へ行くことに。友門さんとは6年生から一緒。長い付き合いだと笑う。この地以外で暮らしたことはありませんか?の質問に「大学の時、少し市外で住んだけれどすぐ戻ってきました。ほとんど足助で」と支真子さん。友門さんが「大学出て二年東京に行っていて」と言いかけたところに「そうなの?」と桃治くん。初めて知ってお父さんの過去に少々驚きの様子。「お祭りがあつたから帰ってきた」そうだ。足助まつりは地域の人々がとても大切にしている行事。友門さんと同じように思う人は多いという。

足助の良さについて友門さんは「嫌だと思ってもいるかもしれないけど」と前置きをしながらも「子どもからじいさんばあさんまでつながりがある。『おまん、どこの子だん』と聞かれてきた

★意外と「コト足りる」足助の町

子育てについてはどうだろうか。支真子さんが語る。「子どもたちはピアノとそろばんと空手の習い事をやっています。すぐ近くでできるのでごく助かっています。自分たちで行くことができるので、送り迎えがいりません」。習い事が全て徒歩圏内とは親にとつては嬉しいかぎりであるう。

続けてこう話す。「子どもたちだけで買い物にも行けます。駄菓子屋の『ぜんざ』、『丸八』さんも子ども向けの物があるし、『白久』さんとか。お小遣いを持たせて自分たちで行ける場所があります。」「10円、20円の駄菓子がある『ぜんざ』には100円を持たせて、これで買つてい」と言う、自分で考えて買って来ます。

近所で習い事ができ、行ける場所があり、同年代の友達もいる。その友達のお母さん方が近くにいるから、助けてもらったり、いろいろとお話もできたりする。子育てはしやすい町だと支真子さんは言う。

不便なところは無い様子。「スーパーマーケットがあるし、ドラッグストアアスギヤマもある。学校もある。困ったことはありません。病院もあり、子育てには良い環境だと思います」と、これから足助で暮らしてみたい人には心強い言葉。子ども園から高校まで公共施設が充実し、お店もある。意外と「コト足りる」のがこの町の魅力でもある。



えると『ほじや、あその坊主だな』という感じですが、そこから可愛がつてくれたりするところもあるだろうし、そこは地域性が残っているところかな。他にも良い町にしようとする人が多い町とも語る。足助で商売をしたい人と家を貸したい人の窓口となる「あきびと座」はまさにその取り組みの一つ。

支真子さんは「自然だと思えます」と即答。「都会の「ちやちや」したところだと息が詰まっちゃうんですけど、周りに緑や川があるのが環境的に良いと思います」。

★帰ってくる選択肢を残したい

今後どうなっていくといい? 10年後どうなっているといい?と問いかけると「子どもの数が少ないので不安になることもある」と支真子さん。友門さんは「住宅を作れば良いというものでもないし」と考えつつも、そこはやはり「子どもの声がする」といいな。年末年始、帰省で子どもの声が出るとそれだけでいいなと思う。年末年始だけじゃなくて普段からしているといいな」。

子どもたちに願う事、伝えたい事はあるだろうか。「足助でもいいかなという気持ちでどこかにもたせておきたい。出ていったとしても帰ってこられる町を作っておきたい。この町をどうにか残して、帰るっていう選択肢を残しておければいいな」。





と「わかんない」と桃治くん。お父さんの「なんでも食べるんじゃないの(笑)」の声にみんな大笑い。ひまわりの種だけでなく、いちごなどのフルーツ、ラーメンも食べるようだ。

飼っているハムスターの名前は「だいく」。飼いはじめて1年。ちょうど夏季ちゃんの手のひらにおさまるサイズでとても可愛い。「飼いたい」と言った夏季ちゃんが責任をもつてだいくちゃんのお世話をしている。

★仲良し兄弟はハムスターに夢中!

お父さんとお母さんにインタビュー中も終始じゃれあい、仲良し兄弟の桃治くんと夏季ちゃん。季節が感じられる素敵な名前の由来を聞いてみると「夏生まれなのと、桃が好き。桃治の治は、鍛冶屋からとっています」と友門さん。ち



いかな」と友門さんは言う。支真子さんは「楽しい思い出が多い所だといいな。小さい頃こんなことがあったなというのを大きくなくても思い出して後から話せたりとか、子どもたちがそういう風に思える町だといいな」

最後にUターン、Uターンを考える方へのメッセージを聞いてみた。「ずっと出てこない」と言いつつも「子どもだったら一緒に遊ぼうと言うと思うけど、大人もそんなところが入り口であっていいかなと思います。一緒に遊ぼうなり、仲間になつていろいろやってみましょうなり。入り口はいっぱいあるし、最低限同じ世代はいると思うのでそこまで怖がらずに気楽に来ていただければ」と友門さん。そして最後に一言。「日当たりのいい場所選びなよ(笑)」



★大きくなったら・・・

最後に大きくなったら何になりたいかを聞いてみた。「うーん」と考え中の夏季ちゃん。「鍛冶屋」と少し照れながらも即答する桃治くん。「何て言った?大きい声で言って」とお父さんに促され「かじやー」と繰り返す桃治くん。取材スタッフからも思わず「お」と感嘆の声が。普段からそのような会話があるようだが、寝ている桃治くんの耳元でお父さんが夜な「鍛冶屋・鍛冶屋」とささやくという面白いエピソードも聞かせてくれた。やりたいのであれば、できる環境を作っておいてあげたいと親心も覗く。8代目誕生も期待できそうだ。

好きなことは何だろうか。「本を読む」と桃治くん。すかさず「言うと思った」と夏季ちゃんが言うほど読書は日常のようだ。愛読書は「ハムスターの研究レポート」。ハムスターを飼いだめたことがきっかけで探してみたところ、学校で見つけた。本を読んでわかった事として「ハムスターは色々食べる。ほとんど何でも食べる」とのこと。「お菓子やおにぎりとか?」と聞く

なみに家族全員7月生まれだそう。

お友達いる?と尋ねると「はい」とゆつくり頷く。言い方も頷く仕草も一緒の二人。学校では本を読んだり、絵を描いたりして過ごす。家に友達が出来た時はゲームやカード遊びなど、外より家の中で遊ぶことの方が多いい言うが、雪が降ったら話は別。「友達とかまくらを作ったよ」と教えてくれた。



地元市民ライター深見委員
【取材日 令和4年1月8日】

足助の町並みにある紹介したい“モノ”④

縄文の宝庫・足助町に2体のビーナス!?



足助資料館では、まず高所金庫のことを聞いてみたのですが、残念ながら新しい情報は得られませんでした。気を取り直して、足助の縄文土器を見ようとして1号展示室に行ってみました。足助資料館の展示品は中学生のときに見た気がしますが、展示内容は記憶の彼方です。なんとなく「足助の縄文遺跡」といえば今朝平遺跡だよ」と潜在意識に刻まれていたのですが、パネルを見てびっくり!

足助町には、縄文時代の遺跡が90か所以上あり、愛知県内では、縄文の宝庫と呼ばれています。と書いてあるではないですか!!……(Webに続く)



続きはこちら



高木伸泰 支援員/あすけ通信
足助町則定(現・豊田市則定町)に生まれる。
(有)タカキ工業代表取締役、あすけ通信編集
委員会等の地域活動に参加。

足助の縄文土器が展示されている足助資料館

足助資料館は足助小学校の横、足助中学校の下に位置しています。大正12年(1923)に建てられた愛知県蚕業取締所足助支所を利用して、昭和62年(1987)に開館したそうです。旧足助町内から出土した縄文土器、城跡公園足助城、三河土人形、三河漆をテーマに展示を行っています。現在の開館日は土曜日・日曜日で、入場無料です。

足助中馬館には縄文土器がたくさん並んでいたのだから「これは全部足助の出土品ですか?」と聞いてみました。そしたら「ここに展示してあるのは、ほとんどが寄贈品で、足助の物は足助資料館に展示してあります」ということでした。これは、足助資料館に行ってみるしかない!……という流れで足を運んだ足助資料館と、足助の縄文遺跡を代表する今朝平遺跡、そして今朝平遺跡から出土した縄文のビーナスを紹介します。

こんにはー足助地区の則定町で暮らしている高木伸泰です。足助重伝建地区10周年コラムvol.1「なぜここに?高所金庫の謎を解く」では、足助中馬館に行つて話を聞いたのですが、「足助資料館に行つてみれば、外にある金庫の扉のことが、もう少し詳しく分かるかもしれない」という情報を得ました。このとき、足助中馬館では「あつまれ じょうもんの土器」というイベント名で縄文土器を展示中だったのですよね。前の年にも縄文土器の展示をしていて「ジョウモンの奇妙な文様」刻むぜ 縄文のビーナス!」展は、そのタイトルとチラシデザインが、漫画「ジョジョの奇妙な冒険」のオマージュではないかとネット上でも話題になり、「このチラシを見て来た」というお客さんも多かったそうです。今回はゲームソフト「あつまれ どうぶつの森」のオマージュなのかな?」



ローカルメディア連動記事

「足助の住民だから知っている、ここにしかない魅力的なモノたち」
木浦支援員が編集長を務める、「とよたでつながるローカルメディア縁側」のスピノフ連動記事として、4回にわたって連載された「足助重伝建地区10周年コラム」。その冒頭部分の本誌で紹介したい。続きはQRコードから「縁側」サイトにアクセスして読んで欲しい。

足助の町並みにある紹介したい“モノ”①

なぜここに?高所金庫の謎を解く



足助重伝建10
足助重伝建地区選定10周年

はじめに

こんにはー足助地区の則定町で暮らしている高木伸泰です。「縁側」では、あすけ聞き書き隊事務局としての活動をインタビュー記事で紹介してもらっています。

今年は重伝建選定から10周年ということで、足助まちづくり推進協議会に「重伝建地区選定10周年事業実行委員会」が設置されました。私も、10周年事業実行委員会の支援員として、活動の記録と情報発信を担当しています。今回は、足助地域会議の地域予算提案事業として、U・Iターン促進を目的に10年間発行している「あすけ通信」の編集委員という立場での参加となります。本コラムでは、「あすけ通信」の表紙写真を撮影してくれている鈴木悠太さんにも協力をお願いし、10周年事業実行委員会で挙げられた、「足助の町並みにある紹介したいモノ」について4回に渡って綴りたいと思います。

足助中馬館の「高所金庫」

昨年6月に開催された第3回実行委員会会議で、「足助の町並みにある紹介したいモノ」についての情報が、実行委員のみならずから寄せられました。まずは、その中から「高所金庫」について紹介します。

実行委員の方から紹介してみたいところとして挙げられた「高所金庫」の情報は「中馬館の横を抜け、中央駐車場に向かって行く左手の壁面に大きな金庫の扉があります。なぜこんな位置に?」と、とても不思議な光景です。我が家では、これを「高所金庫」と勝手に名付けて読んでいます」というものでした。



私も「変なところに金庫の扉があるなあ。どうやって使っていたのだろうか?」と疑問に思ったことがあります。ということで、あの「高所金庫」は何なのかを知るために足助中馬館に行ってみました。……(Webに続く)



続きはこちら



今回は、足助重伝建選定10周年事業実行委員会で「足助の町並みにある紹介したいモノ」として取り上げられた中から、お釜稲荷について綴りたいと思います。実行委員会の方から寄せられた情報は「大きなお釜がある」、「木の木目が狐に見える写真が飾つてある」というものでした。今回はその巨大なお釜がなぜ祀られるようになったのか、飾られている写真は何なのか、その謎に迫っていききたいと思います。

謎の巨大なお釜に入ったお稲荷さん

お釜稲荷は田町にあります。JAあいち豊田足助支店の横の、赤い大きな鳥居をくぐり、その先の緩やかなカーブを曲がると、右手側に鳥居がみえてきます。そこがお釜稲荷です。鳥居をくぐり登っていくと直径2mはあると思われる巨大なお釜が祀られており、一際目を引きます。

昔話で語り継がれてきたお釜稲荷

足助の町並みにある「マンリン書店」で発行・販売している本「足助の昔話」に、こんな昔話がありました。

今からおよそ700年以上の前のお話。足助の里に一升釜を下げた白髪の老人が現れました。その老人は村人たちの相談にのりながら、携えていた一升釜でご飯を炊いて皆にふるまったそう。

不思議なことに、ひっきりなしに相談に訪れる人にご飯をふるまっても、お釜の中のご飯は尽きることにはなかつたそうです。不思議に思った村人が老人に尋ねると「わしはこの先三十里離れた山に住む平八稲荷である」と言つて去つていったそうです。

それから数百年後、足助の領主となつた本多淡路守の夢枕にその老人が現れました。老人は、「わしは平八稲荷。これから足助の村人たちの助け、守っていくのならば力を貸そう。我が釜を探し出し祀られよ」と行つたそうです。

翌朝、本多淡路守は平八稲荷を知るものを訪ね歩き、ついに釜を見つけ、本多家の守り神として陣屋の庭に大切に祀つたそうです。……(Webに続く)



続きはこちら



鈴木悠太 支援員/あすけ通信
足助町に生まれ、2017年より新盛地区に障がい者福祉施設を立ち上げる、あすけ通信編集委員会等の地域活動に参加。



高齢化に伴って手入れができなくなってきた

近藤さんは観音山のある田町ご出身です。高等学校の教員や県の教育機関で働き、平成13年頃に足助に戻ってきました。田町の活性化委員会に所属し、観音山の整備事業に携わってきました。

豊田市の地域活動支援制度であるわくわく事業の助成を受け、山頂までの観音寺参道の整備、ベンチやぼんぼり(明かりを灯す行燈)の設置など行ってきました。お城(大観音城)の奥までの整備を考えていましたが、わくわく事業の継続申請ができなかつたため、参道のみで断念せざるを得なかつたそうです。

第二の香嵐溪と呼ばれているように、秋の紅葉と景色が素晴らしく、魅力溢れるある歴史のある場所です。しかし観光シーズンになつても参道入り口手前にある、赤い鳥居から奥へ行く人はほとんどいません。近藤さんは「寂しい」と話していました。……(Webに続く)



続きはこちら

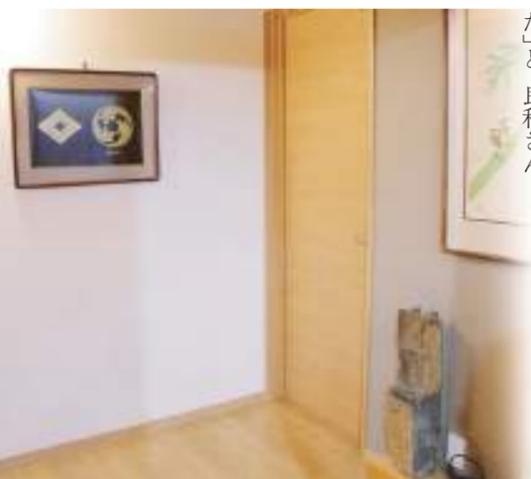


改築前の横地家

★伝統的建造物で二世帯住まい
 横地さん宅は伝統的建造物の特定を受けた後、約2年という長い期間をかけて修理・修景工事が施され、江戸末期の頃の姿を戻した。その工事は、家自体を地面から1・5mほど持ち上げて基礎から修復するという、とても大がかりなものだった。
 自宅を直したことをきっかけに、足助に住み始めて5年になる良和さん一家。1階はご両親の朗さんと幸路さんの居住スペース。2階には良和さんと妻の愛子さん、娘の莉心ちゃんと未梨ちゃん



改築後の横地家



素敵にリフォームされた玄関

やんが暮らしている。愛子さんが希望したのは、キッチン、お風呂、ランドリースペースをそれぞれの階に作ることも。「今とても快適に暮らしています。朝とお昼はそれぞれですが、晩御飯はお義父さん、お義母さんと一緒に食べることにしているんです」と愛子さん。
 伝統的建造物の修理工事を行うには様々な制約があり、間取りにも限りがある中で、二世帯が快適に暮らせる工夫をされている。きれいに修景された自宅を見て、「自分の家ながら、こんな風になるんだ、すごいな、とびつくりしました」と、良和さん。



豊田市足助町の町並み一帯が、愛知県初の重伝建に選定されたのが、今から10年前の2011年6月。歴史を感じさせる家屋が軒を連ねる一角にある、「伝統的建造物」の名にふさわしい家屋で、横地良和さんご一家は暮らしている。



動画はこちら

恥ずかしそうに隠れる未梨ちゃん



★地域に見守られる子育て

長女の莉心ちゃんは現在7歳、算数、体育、図工が好きな足助小学校の1年生。学校ではサッカーや縄跳びをし、家に帰ってからはお絵かきやピアノで遊ぶ。また、近くの交流館でダンスを習い、ピアノのおけいこにも通っている。「ピアノを弾くのは楽しいから、毎日練習するよ」と話してくれた。

次女で5歳の未梨ちゃんは、ちよっぴり恥ずかしがり屋さん。でも、「好きなものはなに？」と聞いてみると、「りんごとヨーグルト」と教えてくれたり、子ども園の発表会の演目だった「おたまじゃくしの101ちゃん」の絵本を持ってきて見せてくれた。

★住んでみて実感！足助の魅力

結婚後、良和さんはすぐにも足助に住むつもりだったが、「二度は外で暮らした方が良い」と、父親の朗さんから言われたこともあって、しばらくは、良和さんと愛子さん両方の職場に近い瀬戸市内にアパートを借りて住んでいた。「その頃は隣にどんな人が住んでいるのかわらなかつたし、知る必要もなかつたですね。ほとんどが顔見知りのような足助とは全然違いますよね」と、良和さんは言う。

愛子さんは尾張旭市の出身。小学校の頃に、親戚の人たちと、足助にバーベキューをしにきたことがあるとのこと。「でも、まさかここに住むことになるとは思っていませんでした」そんな愛子さん、5年住んでみて、お気に入り入りをたくさん見つけたそうだ。

「足助では、1月の八幡さんの七草粥に始まり、2月から3月にかけての中馬のおひなさん、春と秋のお祭り、香嵐溪のみみじ、商店街の年末抽選会など、1年を通して様々な行事があります。中でも楽しみなのが夏の祇園まつり。各町内に立てられる提灯屋台に明かりが灯り、出店で金魚すくいをしたり、食べ歩きをしたり。最後に花火があがるととても楽しいです」

「足助は近くを散歩するだけでも、本当に素敵なお店が並ぶ。川沿いの遊歩道の花桃は、これまで見たことがないくらいきれいです。歩いて行けるところに、郵便局や、子どもが習い事に通う交流館もあつてとても便利だし、今日はどのお店で買おうか、と選べるくらい何軒もの和



まだまだ手のかかる娘さんたちを育てながら、NICU(新生児集中治療室)の看護師というハードな仕事をこなしている愛子さん。毎日勤務先の瀬戸市まで通い、また仕事柄、夜勤の日もある。未梨ちゃんのことでも園の送り迎えは、良和さんのご両親も協力してくれるそうだ。それでも大変な毎日を送っているはずの愛子さんは、「足助では近所の方たちも子どもを見守ってくれるので、仕事をしながらでも、安心して子育てができています」と話す。

良和さんのお母さんは、「このあたりの人は、『よその子もうちの子』という気持ちを持っていて、私が子育てをする頃から近所の人たちと協力してやっています。例えば『私が見ているからご飯の支度しておいでよ』と声を掛け合ったりして」と振り返る。



菓子屋さんがあるので、おやつや実家への土産を買う楽しみがあります」

「私の1番のお気に入りのお店は、こだわりの果物を買っている八百屋さんです。スーパーの売り場では見たこともない、とても美味しい果物があるので、今はもっぱらそのお店を利用しています。それから、お母さんが働いているうなぎ屋さんのうなぎがほんとうにおいしくて、それまであまり好きではなかったのに、今では大好きになりました。あとは子どもたちが安全に遊べる広場か、公園があつたらいいことないですね」



★10年を機に見直しを

重伝建制度導入の際に、伝建部会の委員だった良和さんのお父さん、朗さんに想いを伺った。「足助の町並みやお祭りといった文化や、今の暮らしを守るためには、人口の減少に歯止めをかけるないとだめだと思います」

「若い人たちが足助に家を持って、『帰って来られるまち』にしておくことが大事です。重伝建に選定されたことが、その足かせになるようでは本末転倒です。選定されて10年という節目にあたって、補助金制度をもっと分かりやすく、使いやすくする、また部分的な修繕も可能にするなど、地域に合った制度にするための見直しが必要ではないかと私は思います」



★引き継がれる「足助愛」

良和さんのご両親が足助に暮らすようになった経緯についても聞いてみた。結婚後、足助の隣にある旧旭町に暮らしていた良和さんのご両親は、お父さんが亡くなった後、一人暮らしとなったお母さんと一緒に暮らすため、良和さんが生まれる1か月ほど前に足助に戻ったそうのだ。

「お母さんが心配、というのも確かに足助に帰る理由の一つでしたが、それより何より主人の「足助愛」が強くて、それに引っぱられて帰って来たようなものなんですよ」この足助愛は、良和さんも相当に強かったらしく、足助を離れて暮らしている間も、春と秋のお祭りの時期や、地域の消防団の活動に参加するためには、帰宅が夜中になろうと足助に通っていたそうのだ。

「夜中の1時2時に帰って来て、風呂に入り、ちよつと寝て、4時半に起きて仕事に行く、みたいな生活していました」「足助で生まれ育った男の人にとって、お祭りに出ること、消防団に入るのが当たり前のことみたいですね」と、母親の幸路さんは半ば呆れ顔。



★人の温かさがある環境をつなぎたい

「足助」と言えば、「香風溪」と連想されるほど、全国的にも有名な観光地であり、秋ともなると、ものすごい数の観光客が紅葉目当てに足助を訪れる。「僕から見たら香風溪は、ただの近所の山だし、もみじがきれい、と言われても、もみじはただのもみじ、という感覚です。香風溪の風景は、僕にとってはあまりに日常的で」良和さんが感じている足助の魅力はもっと別のものようだ。「僕がずっと足助にいて、これからは、人と足助に住みたい、と思うのは、人どうしのつながりを大切に考える方や、学校の規模が小さく、少人数だからこそ、1人1人に合った指導をしてもらえる教育の場がある、そういうところだと思います」

美しい景色、こだわりの商品が買えるお店、そして、親だけでなく、近所の人たちの目も届くように、安心して子育てができる、そんな環境をこどもたちが成長しても残しておきたい、と橋地家の方たちは口を揃えて言う。

足助の町並みがこんなにも魅力的なのは、「THE江戸」でも、「THE明治」でもなく、色々な時代の建物が混在しているところだと多くの人が言う。

最後に莉心ちゃんに「大きくなったら、どんなお仕事をしたい?」と聞いてみた。

「おうちを建てる人になりたい。かわいい階段のあるおうちを建てたいな」

足助のこのすてきな町並みに、莉心ちゃんが建てるかわいいおうちが並ぶのを見てみたい、と思った。

地元市民ライター 奥村委員
【取材日 令和3年12月9日】





★家づくりのこだわり
孝明さんの家づくりのこだわりを伺ったところは「みんなが集まる時間を大切にしたい」という点だった。食事が終わったらすぐに自分の部屋に行ってしまうのではなく、家族が同じ空間でいっしょに過ごす時間が長く持てるような家にしたかったのだそう。

広々としたリビングは、杉板張りとしつこい仕上げの壁。畳敷きの小上がりがあり、暖かそうな掘りごたつが目に入る。対面キッチンと小上がりの間にはカウンターがあり、料理をそこに出せば、みんなが持つて行ってくれる。長いカウンターなので、子どもたちが一緒に並んで勉強することもできそう。



木がふんだんに使われた素敵リビング

キッチンからは、部屋全体が見渡せ、秋には大きな掃き出し窓から香嵐溪の紅葉が楽しめる。孝明さんと子どもたちが香嵐溪の飯盛山に登り、山頂から「今日の昼ごはんは、うどん！」と叫んだら、家に居たさと子さんに聞こえて会話ができたというエピソードも聞いた。



家から見える飯盛山

重伝建の新町にUターンされた三宅孝明さんご一家は、奥様のさと子さんと、長女の日菜梨さん（小5）、長男の蓮生くん（小3）、次女の七瑠さん（年長）の5人家族。重伝建内の補助制度を活用して作った塀と調和したデザインの玄関を入ると、ヒノキの香りに包まれた。空き地を購入し、5年前に新築した家だがまだまだ木の香り残っている。





◀ダンスの習い事の様子

子どもたちだけで習い事へ

さと子さんに足助の第一印象を聞いたところ「この辺は凄く便利なところだなと思います。学校も近いし病院もあるしコンビニもある。ガソリンスタンドもあるし薬局もあるしスーパーもあって、バスも走っている」という答え。

さと子さんの実家はもともと不便な場所、家のない山道を何キロも歩いて通学していたそうだ。それに比べると「家はたくさんあるし街灯もあり、こどもの習い事も足助交流館まで自分で歩いて行けるので、すごくありがたいです」とのこと。子どもたちは、ダンス、英語、そろばん、ピアノなどをそれぞれ習いに行っており「習い事に行く友達に会えるので、遊びの延長のような感覚みたいです」と話してくれた。

★さと子さんから見た足助

★長女の小学校入学を機にUターン

孝明さんとさと子さんは、結婚当初は豊田市街のマンションで暮らしていた。その後、蓮生くんが生まれるときにさと子さんのご実家（豊田市松平地区）に引っ越し、日菜梨さんの小学校入学を機にUターンした。

Uターンの理由を尋ねると「長男なので戻るのがどうかと子どもの頃から思っていました」と孝明さん。「何も言われたことはなかったのですが、長男だとは思っていました。外に住んでいても、消防やお祭りには絶対に戻って来ていたので、そういう縁は切れることはないと感じていました」とさと子さん。孝明さんは、お祭りのお囃子がそれぞれの町で異なるということもあり、帰って来るなら他の町ではなく新町と決めていた。途中で転校しなくて済むように日菜梨さんが小学校1年生になるタイミングでUターンすることを決断した。



Uターンをしてきた頃の写真



マンリン書店



補助の対象となった堺



★足助の良いところ

こどもの頃を振り返ったときに、孝明さんは「地域に育てられた」と感じるそうだ。町を歩けば、近所の人たちとあいさつを交わし「おまん、どこへ行くんだ」と声をかけられる。褒められることも怒られることもあった。実家から100m程の距離にあるマンリン書店まで行くことしたら、次々と声をかけられ、本を買ってくるのに2時間かかったこともあるという。そういうコミュニケーションがあることが、ここで暮らして行きたいと思った理由の一つだ。

さと子さんも「小学校はずっと同じクラスで馴染みの人間関係の中で成長できるので穏やかに過ごしています。近所の人もあいさつをしてくださるし、声をかけてくれます」と、地域に残るコミュニケーションの温かさを語ってくれた。また、小学校は人数が少ない分アットホームで、一人一人しっかり見てもらえて安心できるそうだ。子育てに不便なことはあるかと聞いたところ「町の中は狭い道を車が走ってくるし公園もないので、小さい子が外で遊べる場所が少ないですね。育児休暇の時に帰っていた子育てサークルでも、みなさんが言われていました」とのこと。公園があったら良いというのは、子育て世代にとつての共通の思いのようだ。



新築にあたり重伝建の制度がよく分かっていなかったため、堺のみが補助の対象となった。工事の着工を3ヶ月遅らせることで主屋まで対象範囲を広げることができたが、日菜梨さんの入学のタイミングを優先させたそうだ。

孝明さんのご両親が住む実家からは30m程の距離にあり、子どもたちは学校やこども園が終わると、さと子さんが仕事を終えて帰るまで実家で過ごす。孝明さんは自動車販売整備会社勤務でさと子さんは保育士。共働きの夫婦には実家の助けがありがたい。

歩いて30m
近くにあるご実家





★10年後も誇れる足助に
 今後の足助について、孝明さんは「10年後も自慢できる足助になつてほしい」といけない。子どもたちが『地元は足助だよ』と誇れる足助にしたいです。山も川もあるし足助は良いところだと思ふので、大きくなる前に足助の良さを1つでも多く知っておくと、より好きになるかなと思います」と語ってくれた。

さと子さんは、お祭り、中馬のおひなさん、香嵐溪のイベントなど、足助ならではのイベントを工夫してやっているのが良いので、そういう伝統のあるものがこれからも続いて行って欲しいと思う。子どもたちも楽しみにしているし、育つたところのことやっていたというの、すごく良い思い出ですよ」とのこと。

★元気いっぱいな子どもたち

リビングの太い梁に吊るされたロープをスルスルと登る子どもたちは元気いっぱいだ。横に渡されたロープをハンモックのようにして寝そべるバランス感覚には驚かされた。

子どもたちはみんな体を動かすことが大好きなようで、日菜梨さんはバレーボールをやっており、野球をやっている蓮生くんは「香嵐溪の駅伝大会で3区を走って区間新記録だったんだよ」と教えてくれた。七瑠さんは、スカイホール豊田（豊田市総合体育館）のクリスマスフェスタで新体操の金メダルももらったと、うれしそうに見せてくれた。



金メダルを見せてくれる七瑠さん



★U・イーターナーを増やすために
 U・イーターナーを増やす方策について、孝明さんは定住する前にお試しで住んでみる事ができる仕組みがあると良いと考えており「1年間住んでもらうと絶対足助が好きになる。1年住まなくても、住むことができる機会があるときつと好きになる。一番良いのは、お祭りに参加すること」と話してくれた。体験型で楽しいと感じてもらえるような機会があると、U・イーターナーを勧める側としても、参加してもらって合う合わないか自分で決めてもらえれば良いので、気軽に声をかけられるだろうということだった。



壁に飾られている子どもたちの絵を、以前どこかで見えた気がしたので「あの絵は何か賞をもらったものですか？」と聞いてみたところ、鞍ヶ池公園の写生大会で賞をもらった絵だという。年は違うが3人それぞれに賞をもらっており、七瑠さんの作品は市長賞を受賞している。

子どもたちに学校の良いところを聞いてみたところ、給食がおいしいということで、大好きなメニューが口々に出てきて大いに盛り上がった。さと子さんによると、足助給食センターで作った料理がすぐに届くので、温かい給食が食べられるのだそうだ。メニューに野菜や魚が多く、給食で野菜をたくさん食べてくれているとのこと。



とよたでつながる
ローカルメディア



縁側
engawa



ローカルメディア連動記事

「持ち続けた一流のプロ意識。足助最後の芸者、後藤さんの歩んできた道」

「とよたでつながるローカルメディア縁側」のスピノフ連動記事として掲載されたインタビュー記事「持ち続けた一流のプロ意識。足助最後の芸者、後藤さんの歩んできた道」。
その概要記事を本誌で紹介したい。詳細は、QRコードから「縁側」サイトにアクセスして読んで欲しい。



呼ぶ花代(料金)は、宴会のある料亭や旅館、芸者の所属する置屋、置屋を統括する検番(場所によってはない場合も)、芸者で分配される。そのため芸者の取り分はわずかだった。

18歳で芸者としてお座敷にあがるようになった。客が芸者

「三味線の稽古しているとね、足が痺れちゃうでしょ。ちよつと足をずらすとね、後ろからその足をぎゅつと踏んでかれるの。そういう時代があつて初めて芸子さんになれる。下働きの時「やっぱり芸ができないといかん」。そう思った」

「終戦後でしょ。引き揚げてきて、親も働くところを見つけないきゃいけない。芸子さんになれば収入があるじゃん。親に仕送りしなきゃいかんもんね」

後藤さんはたくさんいる芸者のなかでいちばん歳が若く、三味線が弾けたために重宝がられた。

いかに名前を覚えてもらうか

21歳の時、知り合いがやっていた「市松」という置屋から声がかかり、足助に戻ってきた。当時昭和30年代、足助全体で30人ほどの芸者がいた。山林関係の仕事をする人、消防団など地域のお客さんの他、知事や国会議員などの普通なら出会わないような人たちのお座敷に呼ばれることもあった。



芸者たちは紅葉の名所香嵐溪の宣伝にも一役買っていた。広場に演舞場があり、観光の時期は1ヶ月間、毎週日曜日に芸者たちが踊っていた。昭和31年には、名古屋までマイクロバスで出かけて宣伝をしたこともあった。

偉い人つて、酔っ払って余計なことをおしゃべりしちゃいかんでしょ。徳利にお酒の代わりにお茶入れてもらって、首のところ紙のこりり印をつけとく。若い芸子さんに「あの方にはこれを注いでね」と言う。そうすると、「あの芸子さん、機転が聞くな」と思ってもらえるわけじゃない。そういうふうにお客さんの印象に残るようにして名を売った。

「やっぱり芸ができないといかん」

昭和10年に足助で生まれた後藤さん。電気関係の会社で働いていた父が転勤するのに伴い、母、ふたりの兄と満州へ行った。終戦になったのは小学3年生の時。その翌年、引き揚げ命令が出て、足助に戻った。

小学校を卒業すると家の事情で、岡崎の中学に転校した。その時に三味線を習っていたことがきっかけとなり、卒業後、半田の置屋で修行を始める。置屋とは、芸者が共同生活を送りながら三味線や踊りの稽古に励む場のこと。芸のほかにも、着物の着せ方を覚え、芸者としてお座敷に出る「お姉さん」たちのお世話をし、置屋のおかみさんの代わりに打てるようにと麻雀、花札、ランプを仕込まれ、水仕事以外の掃除をした。

「塩の道」、「中馬街道」と呼ばれ江戸時代から物資の輸送路として栄えてきた足助の町。町並みのなかに、大正、昭和期に高級料亭として名を馳せた寿家がある。その2階にある大広間で、「足助最後の芸者」と呼ばれる後藤久子さんにお話を伺った。



カナダでは冬の間はひたすらスノーボード、それ以外



旅行でカナダを訪れたとき「私絶対ここに住みたい!!」とカナダに心惹かれ、資金を貯めカナダに渡り生活をスタートさせた。

カナダでは冬の間はひたすらスノーボード、それ以外

★若い頃から行動派だった

鳥居さんご一家は、前所有者から譲り受けた家屋をリフォームして暮らしている。重伝建エリア内にある家屋は、伝統的建造物ではないが立地条件が良く、リビングからは足助川を臨むことができる。ぼーっと窓の外を眺めていると、とても癒される。日当たりもとてもいい。取材した日は雪が舞う寒い日だったが、時折り差す日の光がとても心地よかった。私も足助に住んでいるが、これまでに見たことがない景色だったため足助ではないように感じられた。



動画はこちら



キレイにリフォームされた外観



カナダの頃の智子さん

外の時季は農家で3年過ごした。智子さんは生涯カナダで過ごすつもりだったが、一時帰国した際、健志さんから「喫茶店をやりたいかとパートナーを探しているんだけど、一緒にやらない?」と誘われた。カナダで農家になるためのビザの取得は難しかったし、愛知県に帰ってこれば親孝行にもなると思い、健志さんとの結婚を決めた。



鳥居智子さん(中央)とバンバン堂スタッフの皆さん

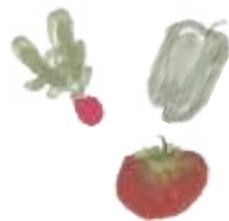
★カフェに加えて2店舗を経営

現在はパンパン堂のほか、「都屋」「小松屋」の経営者でもある。足助には2月から3月にかけて中馬のおひなさんというイベントがある。

2012年、「るじうらのカフェパンパン堂」を足助のまちなかでオープンさせた。レトロで落ち着いた雰囲気の内。昔ながらのおもちゃも置いてあり、タイムスリップしたような気持ちになる。「本当は山奥で喫茶店やりたかったんだけど、知らん間に決まっちゃって。でもまあよかったですね。幅広い世代の人たちが来てくれて。近所のおばあちゃんとかも来てくれるからほんとありがたいよねえ」と智子さんは言う。



クラシックなパンパン堂の室内



両親と離れて暮らしていたため、子どもが小さい頃預けられる人がおらず困ったそう。気軽に子どもを預け合えるといいなあと思いい、息子さんが一歳の時自ら子育てサークルを立ち上げた。

両親と離れて暮らしていたため、子どもが小さい頃預けられる人がおらず困ったそう。気軽に子どもを預け合えるといいなあと思いい、息子さんが一歳の時自ら子育てサークルを立ち上げた。

★自給自足で暮らしながらカフェオープンの準備

現在足助町田町に住んでいるが、はじめは足助の町なかから車で6分ほどの距離にある萩野小学校付近に住みたいと思っていた。地図のコピーを片手に、土日になると足助で家探しという生活を半年ほど続け、ようやく竜岡町に住むことに決まった。農家で働いていたこともあり、野菜、米作り、にわとりを飼うなど自給自足の生活をしてきた。

両親と離れて暮らしていたため、子どもが小さい頃預けられる人がおらず困ったそう。気軽に子どもを預け合えるといいなあと思いい、息子さんが一歳の時自ら子育てサークルを立ち上げた。

★「足助だったらいいなあ」で選んだ



都屋の外観



「るじうらのカフェパンパン堂」へ至る道



素敵にリフォームされたリビング

都市の様子



都屋では、この時期に子どもたちに着物を着て足助の町並みを散歩してもらおうと、「おひなさんぽ」という着物のレンタル着付けサービスを始めた。着物集めもおひなさんぽもすべて、健志さんのアイデアだそう。

オープンしてから2月の中馬のおひなさんの時に開けていたが、去年はコロナで営業できなくなりました。「何かやれることをやらなきゃ！人が集まる所と言えば、スーパー、薬局だから日用品を売ろう！」と都市を始めた。現在は、週3日はお店を開け、食品や手作り雑貨などを販売している。さらに今後は、月に二度、クラフト市や蚤の市を開催できるように、準備を進めている。

毎週火曜日と隔週土曜日に「山で遊びましょう！」と企画を立て、洗米1合、みそ大匙1、切った野菜を持ち寄り、山でご飯を炊いておにぎりや味噌汁を作ってみるまで食べていたそう。子どもたちは自然の中、自由に伸び伸びと遊び、ママたちはコーヒーを飲みながらおしゃべり。サークルのみんなでも子どもを預け合い、助け合っていた。自分で子育てしやすい環境を作り、子育てを楽しんでいたそう。その一方で、喫茶店をオープンさせるという夢に向かって健志さんも動き出していた。



筒形の行灯のことだ。これを町並みの街道沿いに並べる。智子さんはバンバン堂の営業のほか、射的屋、都屋では三味線を弾いたりしている。射的屋はたんころりんの夕涼みの時にだけ現れる、地元のあすこ（足助に住む人たちの愛称）たちに大人気のお店だ。香風溪もみじまつりではホットチョコレートを販売していた。香風溪が終われば、おひなさん。おひなさんが終われば、たんころりん。たんころりんが終われば香風溪。という生活を10年続けているそうだ。「何でもなんに忙しくしているのか、自分でもよく分からんけど、次やりたいことのための資金にしたいから、とにかくがんばる！」「わたし亥年だから、やりたい！と思ったらすぐ行動しちゃうん



小松屋は以前はうどん屋だったが後継者を探していた。智子さんは「いいなあ」と思っていたところ、ご縁あって引き継ぐこととなった。「町のと真ん中だから、ずっと閉めっぱなしにしとくのは嫌じゃんね」令和3年度に行ったシェアハウス「はじまりアパートメント」の取組みを通じて、ここ小松屋でやりたいことが見えてきたという智子さん。「ゲストハウスとして宿泊者を受け入れながら、足助に関わってみたいと思う人たちの居場所になって、彼らの活動を応援したい。入れ替わり立ち替わり、人の出入りがあってもいい。何度も行ったり、帰ってきたりしてもいい。その中から、足助に関わってくれる人が増え、足助でやりたいことができ、足助に移り住んでくれるような核となる人が出てきてほしい。それは、空き家の活用にも町の賑わいにもつながると思う」既に小松屋を手伝いながら、足助でやりたい



小松屋と「はじまりアパートメント」の参加者たち



たんころりん夕涼みの風景

ことを始める準備を進めている料理人がいるそうだ。
智子さんにお話をうかがっている最中、何度も「自分のいる場所をいかに楽しくするか！とにかく楽しく！」と話しているのがとても印象的だった。小松屋の今後がとても楽しみだ。

★やりたい！と思ったら即行動

足助の一年の行事でいうと、2〜3月の中馬のおひなさん、8月のたんころりんの夕涼み、11月の香風溪もみじまつりが智子さんにとっての三大イベントだ。
たんころりんとは、竹かごと和紙で作った円



射的をするバンバン堂

だよ。で、後から人がおらん！どうしようってなつて。自分がやりたいことをこなすために生きてる感じだよ（笑）「いい意味で「猪突猛進」という言葉がぴったりだと思った。

★こんな良い所は、他にないから

みんなから「足助に住んでるなんていいね。羨ましい」と言われることがあるようだ。羨ましい？魅力は何だと思っ？と尋ねると、「自然でしょ！山も川もあるし」と智子さん。「足助は便利だよ。足助病院もスーパー「パレット」も薬局「スギヤマ」もある。バスも通ってるし、住みやすい」広すぎず、ちょうどいい狭さ。すべてがぎゅつとなつている感じも好きなのさ。そうだ。よく「ともちゃん、足助の活性化のためにがんばってるね！」と声をかけられることがあるそうだ。だが智子さんは「活性化なんてまったく考えてないよ。こんないい所だもん、もったいないじゃん！こんないい所、他にないよ。ただもったいないだけだよ（笑）」と答える。

足助のまちという魅力に気づき、それを自分の商売に活かしているだけというのだ。バンバン堂、都屋、小松屋と次々と新しいモノを手掛け、結果的に足助の活性化につながっている。



ケース6 成瀬さんご一家（足助町 田町）

足助田町の銀座通りから一本路地に入ると成瀬史宣さんのご自宅がある。奥様の彩香さん、長男 結生くん（小5）、長女 織音ちゃん（小2）、次男 紘介くん（2歳）の5人家族だ。ご一家は、結生くんが小学生になるタイミングでUターン。空き家バンク制度を利用し、ご実家の近くに家を借りて住んでいる。



★窮屈に感じていた町での暮らし

若い頃に一度足助を離れている史宣さん。確固たる理由は特になく、ただ何となく出たそう。足助に戻るという意思はあったのかをたずねると「まあ長男だから、そういう思いは染みついてた。それに反発する気持ちや、まあどうでもいいっかあ、などいろいろな気持ちがあつたと史宣さん。結婚後、足助に戻るといふ気持ちも残しつつ、将来の展望が明確にあつたわけではないが、彩香さんの地元でもある東郷町でマンションを買って生活していた。

マンションでの生活は、長男の結生くんがまだ幼く、犬も飼っていたからか、下の階の方から度々苦情を言われることがあつた。結生くんは



ご実家の茶室でお話を伺った

家という空間で飛び跳ねてはダメだと思つて育ってきたそう。『ずっと肩身の狭い思いをして生活してたんだわ。嫁さんが一人の時に怒鳴り込んで来てね。これはやっぱいかなよね。とてもこんな所に住んでられん。もうここを出よう！でマンション売ったんだわ』と史宣さん。結生くんが年長さんの時の出来事だ。



★ やっぱり足助で暮らそう

売った方がいいが、さてどこに住もう……。あまり移動もしたくないと、とりあえず近所に引越してそこでゆっくりと今後のことを考えた。小学校を選択する時期だったこともあり、このまま東郷町で暮らすのか、はたまた足助に帰るのか……。2年生になるこのタイミングで足助に戻らないと、たぶんもう帰ってこないだろう。足助に戻るといふことも、ひとつの選択肢として探している」と決断したそう。そうなる次は家探し。実家に住むということは考えておらず、どこか空き家があればいいなあと思っていた。

「足助」「田町」にこだわらず住む場所を探し始めた。足助町の隣、旭地区の市営住宅「エビネの里」の抽選に当たったので、「ここにしよう」と決めかけていたと、足助に空き家があるぞ」と地域の方から声がかかった。まだ空き家バンクに登録準備中の物件だった。



★ 自然のなかで

自由にとびまわれる環境

彩香さんの祖母が鳥根の出身ということもあり昔から山間地、田舎で暮らしたかったそう。週末に足助に来ると、こどもが楽しそう。生き生きしているのがすごく分かる。東郷にいた時とはまったく違う。あたりまえだけど、玄関開けるとすぐ外だし、石があつて、土があつて、草も生えていて虫もいて。なんかすべてがよかったと彩香さん。

結生くんは喘息持ちだそう。幼少期はほとんど入院しており、東郷町に住み続けるのは難しかったと彩香さんは言う。足助で暮らすことには、まったく抵抗がなかったそう。足助に来て、結生くんは喘息が良くなったそう。ジャンプをする「走り回る」というこどもが生き生きうえて当たり前ができるようになった。走れるようになったおかげで友達とも思いっきり遊ぶようになり、積極的になったそう。家をみつけてもらえたのは、地域の方がいろいろ調べてくれたみたい。じいじも心配しているんな所に足を運んでくれて、話を聞いてきてくれたりしていたみたい。三月の終わりに引越してきて、入学、入園もあつて。もう記憶がないくらいわちゃわちゃと、すごい忙しかった。けれど、足助の地域の方は、「どこの子だ？」と「じゃなく、



空き家バンクで見つけた成瀬さんのお住まい



「たまたま住める場所が田町にあつて。従兄弟の家も近所だし、じゃあまあここに腰を下ろしますか！」と足助に戻ることを決めたそう。だがすぐに住めるような状態ではなかった。で、どんどん片づけをした。そうこうしているうちに、空き家改修補助金を知り、水回りの改修と畳を張り替えた。他はどことも直す必要がない状態の家だった。

大家さんご夫婦がとても親身になって心配して下さったそう。一緒に思い出の品を片付けている時、中学時代のカバンが見つかり思い出話に花が咲いた。「今も折に触れ、家族でお邪魔させてもらってます。大家さんにはとても感謝しています」と彩香さん。

「ああ、あそこの家の子だね」ってすぐ受け入れてくれて、親戚のこども達も、毎日毎日遊んでくれた。すごくありがたかった。私自身も家族や親戚の方々にたくさん支えをもらい続けて、やっとここに暮らせています」と彩香さん。

★ 生活に困ることは「なくなった」

彩香さんに足助での生活で困っていることを尋ねると「なくなっちゃった。最初はもやしが高いとか。100均遠いとかあつたけど(笑)」。暮らしやすいよね」と。すると史宣さんが「ちよつと都会すぎるな。畑がないで。住宅密集地だね(笑)」と加えた。「だで暮らしやすいんだよね。山の方にも行けるし、街にも行きやすい。田舎だなあつて所もちゃんと残っているし。足助って奥深いよね」と彩香さん。





「この頃の頃は足助が好きになれなかったという

史宣さんの妹・桂さん家族も足助で暮らしている。長男良太さん、長女実桜さん、次女実凜ちゃん、父の徹さん、母の博子さん、祖母の秀子さんと一緒に住んでいる。

学校の行事は縄跳び大会が好きで、「二重跳び16回飛べるようになったよ」とちよつと照れくさそうに教えてくれた。「足助は自由が多い!! 走れるし、飛べるし!! 田町は食べ物屋さんが多いところが多い。田町は知っている人が多いから好き」と織音ちゃん。ふたりとも足助が大好きなようだ。

次男の絃介君は成瀬家のアイドルだ。ここにこ笑顔がとてもかわいく癒される。結生くんは絃介くんは何をされても怒らないそう。史宣さんが「もう結生はおじいちゃんみたいだよ」と笑って教えてくれた。



「地域にはこどもがいる。せつかく空気もいいし、地域の人の目もある。褒めてくれる人、怒ってくれる人もいる。いい意味でおせっかいしてくる人がたくさんいる。だからこどもがわーと集まれる広場があるといいな。」

こどもが小さいときは家の前の道で遊んでいたけど、六年たつと大きくなってパワーがね。ボール投げで置物を割ったり、枝を折ったり。いつもひやひやしながら、時々『これー!!』と吠えています(笑)」と彩香さん。

★人が集える広場があれば

史宣さんは今年伍長2年目。伍長というのは、他の地域でいう組長だ。伍長という仕事で配りものなどをするうちに近所の方と顔を合わす機会が増え、家に行くきっかけとなり、そこでのいろいろな話をする事で、お互いを知るといふ関係性が築けたそうだ。

★地域の役員をやれば、近所と深く知り合える



成瀬家のアイドル絃介くん

結生くんは少年野球をやっている。現在、足助単独のチームはなく、井郷と合同のチームだそう。足助小学生は、結生くん一人。「もう少し人数が増えてくれるといいな」と結生くんは言う。学校の行事は駅伝大会が一番好きだそう。足助小学校は毎年12月に駅伝大会がある。一年生から六年生の縦割りグループ8チームで香風溪の中を走る。ライバルに勝てるように、学校が終わったら香風溪に走りに行っていたそうだ。

結生くんは将来の夢を聞いてみた。「野球選手!! でも、お父さんとお母さんと同じ福祉関係もいいし、魚が好きだから、魚関係も...」と。とても希望に満ち溢れていた。将来の夢は美容師さん! という織音ちゃんは、よく従姉妹と一緒にまち中を歩いたり、家の前で遊んだりしている。好きな場所は香風溪。特に秋のモミジが好きだそう。

★「足助大好き」なこどもたち



桂さんだが、今は足助が好きなんだそう。意見が違つても、町のことをしっかりと考えている足助の人たちの中で暮らしていることが楽しいそうだ。総勢12名。笑顔が絶えない、とても仲の良いみなさんだ。

取材場所のお茶室は、秀子さんがお茶とお花の稽古をするために作られた。現在は、秀子さんの娘が営むカネサン茶舗が引き継ぎ、お茶のお稽古場として使っている。

地元市民ライター増田委員
【取材日 令和4年2月26日】

豊田市足助 「重伝建地区選定10周年事業」 でしてきたこと

平成23年6月20日に豊田市足助地区が重伝建に選定されてから、ちょうど10年目を迎える令和3年度、足助まちづくり推進協議会に「重伝建地区選定10周年事業実行委員会」(以下「実行委員会」)が設置された。足助自治区7町のうち、伝建地区(※注1)4町(西町、新町、本町、田町)から8名、景観地区(※注2)3町(宮町、松栄町、親王町)から3名の代表者を選出し、そこに足助の各種団体の会長職を兼任する田口敏男氏を会長とする、全12名の「実行委員」で組織した。

さらに、足助の町並みに関わる各種活動団体や大学生らが「支援員」となり、実行委員の活動をサポートした。

事務局は、豊田市の生涯活躍部文化財課足助分室と地域振興部足助支所が運営。地域住民と行政が丸となり、重伝建選定からこれまでの10年間の振り返りを通じて、足助の町並みの未来や今後の新たな取り組み、重伝建制度をこれからのまちづくりにどう活かしていくかなどを考え、話し合った。足助の良いところを未来へ伝えていくための取り組みである。

実行委員会の会議は堀部支援員がファシリテーターを務め、11月を除く毎月開催した。

第1回目の会議は、田口会長からの「足助を背負っていく若いみなさんを委員に指名したが、快く引き受けていただいた。もし10年前に足助が重伝建になっていなかったら、今頃この町は既に無くなっていたと思う。この1年の活動を通じて、足助モデルともいえるような成り立ちへの想いを引き継いでいかなくてはならない。また、町並みでの暮らしをより良くしていくことや、住む者を増やしていくことを目指すのならば、いま足助の町並みで暮らしている子育て世代や若者も、まちづくりに関わっていくことが必要である。そうした背景もあり、この実行委員会メンバーは、これまでまちづくり組織などの活動には携わってこなかった新たな世代、また過半数は女性委員で構成することとなった。

実行委員会では、令和3年度の1年間を通じて、「重伝建」「空き家」「子ども」など、多岐に渡るテーマについて話し合った。また、実際に足助の町並みというフィールドに出て、「町並み歩き」に行き、また足助の良いところをさらに広めていくための「キャッチコピー」「ロゴマーク」「ポスター」の制作、「ローカルツアー」の企画、「ローカルメディア」での情報発信、そしてこの事業報告書「やっぱ 足助 いいじゃん!」あかりのつながる足助の町並みと暮らし」の発行など、実際に何かを生み出すことにも挑戦してきた。

また、重伝建選定からちょうど10周年を迎える日となる6月20日に旧田口家住宅で開催した本事業のキックオフイベントを皮切りに、実行委員会以外のさまざまな方々がこの重伝建地区選定10周年に関連した取り組みを行ってくれた。ここではその代表例として、これまで長年足助の町並みを題材に学習を続けてきてくれた足助小学校の取り組みを紹介する。その他、この10周年を節目にあためて伝統的建造物の現況調査を実施した結果などについては、第5章の資料編でふれることとする。

昔から足助の町並みでは、地域住民と行政が協力し合いながら、まちづくりを進めてきた。その原点に立ち返り、この事業が「重伝建」のみならず、より広い意味での「まちづくり」について、あらためて考えるきっかけとなっていくことを願う。

■令和3年度 豊田市足助「重伝建地区選定10周年実行委員会」 会議テーマ一覧

開催回	開催日	テーマ
第1回	2021年 4月16日	足助の良いところについて考えてみよう&キャッチコピーをつくってみよう
第2回	5月21日	ロゴマークをつくってみよう
第3回	6月18日	ローカルツアーをつくってみよう
第4回	7月16日	ローカルメディアで情報発信してみよう
第5回	8月20日	重伝建制度について考えてみよう
第6回	9月12日/13日/17日	実際に足助の町並みを歩いてみよう
第7回	10月15日	空き家について考えてみよう
第8回	12月17日	子どもについて考えてみよう
第9回	2022年 1月21日	これまでの活動をふりかえって&フリートーク
第10回	2月18日	足助の子どもたちからのメッセージ&中間報告
第11回	3月18日	足助のおとなたちができること&成果報告

果が出ることを期待したい」という言葉で始まった。田口会長の父親である故・田口金八氏は、旧足助町役場の故・小澤庄三氏らとともに、昭和50年代の町並み保存運動に取り組んできた人物でもある。この足助の町並みは、平成23年に重伝建地区に選定される前から、地域住民で独自のルールをつくり、町並みの景観維持に取り組んできた。町並みを流れる足助川の清掃も、景観を守るための大切な活動のひとつとしてきたし、各家庭に眠っている雛人形を斉に飾る「中馬のおひなさん」や、竹かごと和紙でつくった円筒形の行灯を夜の町並みに灯す「たんころりん」など、地域住民が主体的につくりあげてきた町並みを活かした季節折々のイベントは、いま現在も続いている。

地域住民の力によって守られてきた足助の町並みをこれからも守り続けていくためには、次の世代へとま

(※注1)…「伝建地区」:「豊田市伝統的建造物群保存地区」に指定しているエリアの略称
(※注2)…「景観地区」:「豊田市景観計画」に指定しているエリアの略称



重伝建地区選定10周年事業キックオフイベント「THE・民具ショー」の様子



地域住民による足助川の清掃



重伝建地区選定10周年事業「あつまれ!じょうもの土器」まちなか展示の様子



たんころりん

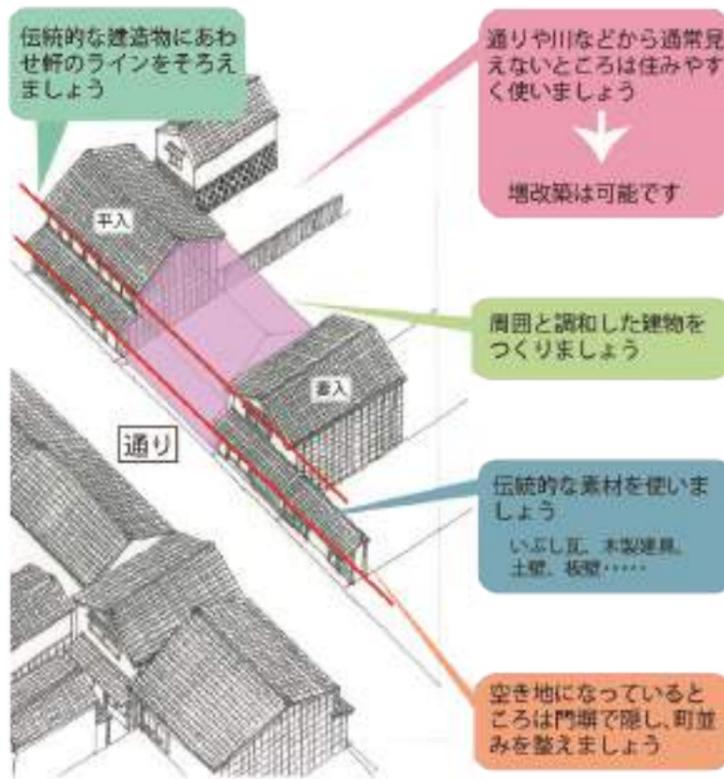


▲「実行委員会ホームページ」はこちら



▲「各会議の詳細内容」はこちら

そもそも、「重伝建」って何ですか？



町並み保存の基本的な考え方

町並みの特徴を保存していくうえでの基本的な考え方は、平成24年度に地域住民と行政が共働で作成した「足助伝建ガイドライン」にまとめられている。

ここでは、重伝建エリア内では「建物は伝統的な素材をつかう」、「建物の軒のラインをそろえる」、「空地を門扉で隠す」などの点を心がけるよう示している。主な対象は周囲から「見える部分」となっており、反対に言えば「見えない部分」についての規制はない。ただし、例外的に「伝統的建造物」(概ね築50年以上で、歴史的な価値がある建物のうち、所有者の同意が得られたもの)に特定された建物については、見えない部分に建てても一定の制約が生じる。



そもそも、「重伝建」って何ですか？

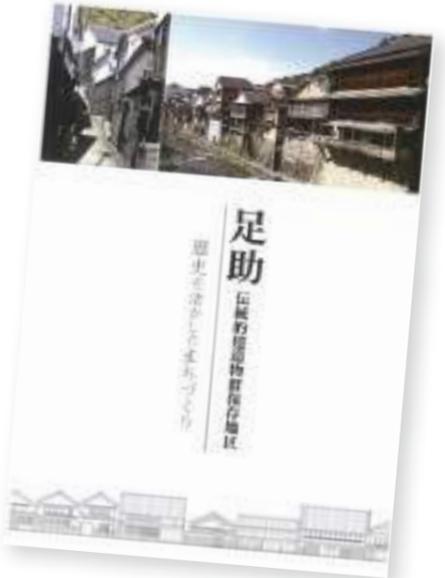
重伝建制度とは？

8月に開催した第5回目の実行委員会会議では、「重伝建制度」をテーマに話し合いを行った。

重伝建とは、全国各地に残る歴史的な集落や町並みを守っていくために、各市町村が保存地区を決定して条例を整備したもののうち、国(文化庁)が全国的にも価値が高いと判断して、選定された地区のこと。令和3年8月2日時点における重伝建地区の数は、全国で126地区、104市町村にのぼる。

かつて尾張・三河から信州を結ぶ伊那街道の重要な中継地にあたり、物資の運搬や人々の通行の要所として栄えた商家町でもあった足助の町並みは、江戸時代後期から明治期にかけての建物が多数現存し、大正期から戦後に建築された建物の多くも、伝統的な形式を踏襲してきた。こうした複数の時代の建物が建ち並ぶ町並みが評価され、平成23年6月20日に、愛知県初の重伝建地区に選定された。

重伝建エリア内では、建物を修理したり新築を行う際に、景観を守るために必要な一定の規制がかかる一方で、基準に見合った整備を行う場合に補助金を受けられるメリットがある。足助の町並みでは、重伝建の選定から10年の間に、約30件にも及ぶ建物の修理・修景が行われてきた。

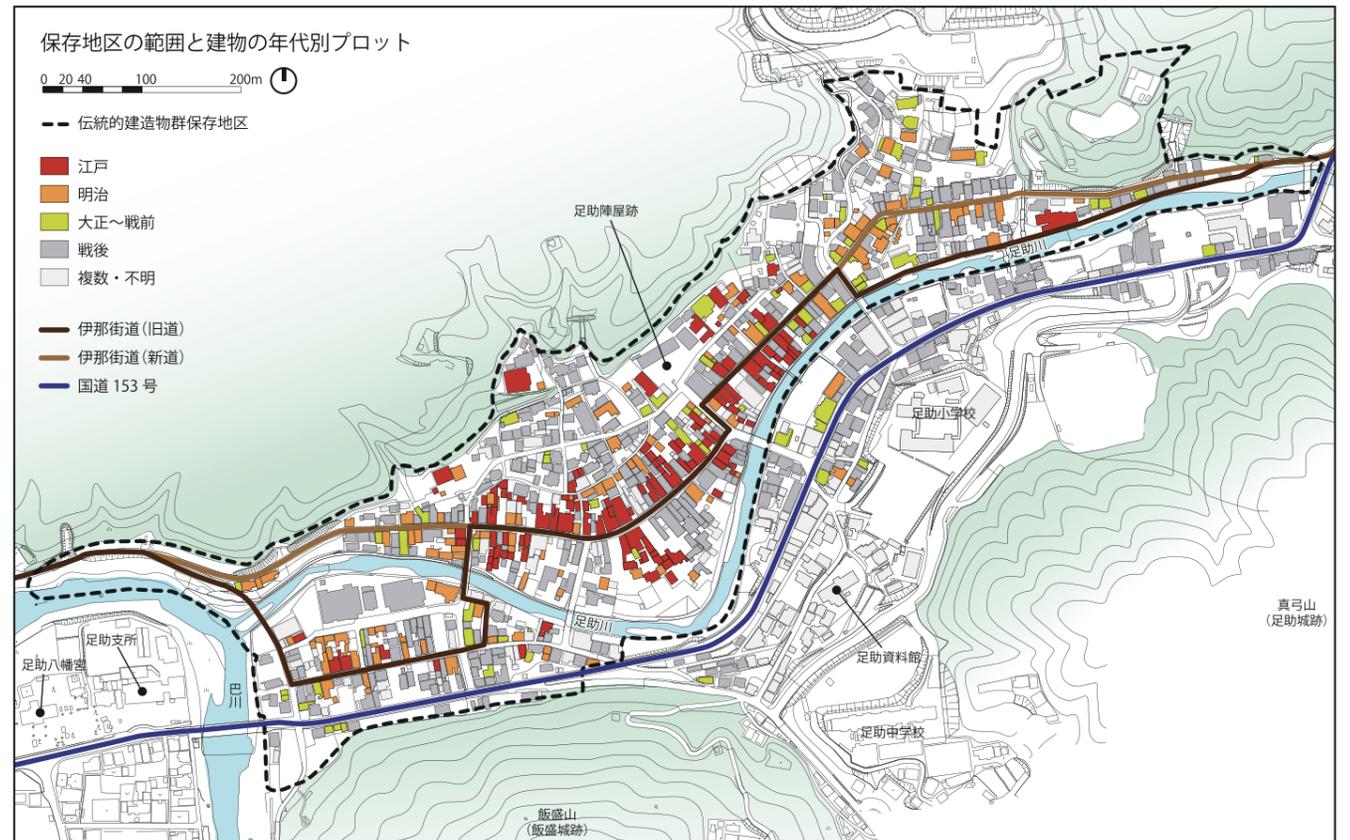


重伝建制度上の「修理」と「修景」の2種類がある

重伝建制度では、なおす建物が「伝統的建造物」か「伝統的建造物以外(一般的な建造物)」のどちらに該当するかで、補助率や補助限度額が変わってくる。また、「伝統的建造物」の特定に同意した建物所有者には、税制上の各種優遇措置も設けられている。

前述のガイドラインでは、「街道沿い」「川沿い」「街道の背後」などのエリアごとの建物の特徴なども示している。重伝建エリア内で修理や修景を行う際には、こうした特徴にも配慮しながら、設計や工事を進めていく必要がある。

また、伝統的建造物の場合は、元々の建物の特徴を知るために、資料(古写真、図面、棟札など)探し、聞き取り調査、建物の痕跡から改造の有無を探るなどといった、建物を復原するための事前準備も必要となる。



▲保存地区の範囲と建物の年代別プロットMAP

修理修景事業 事例①(左:BEFORE 修理・修景前/ 右:AFTER 修理・修景後)



そもそも、「重伝建」って何ですか？



より親しみやすい
重伝建制度にしたいために

重伝建制度について話し合うワークショップでは、「制度があることで町並みが守られる」「補助金があるので経済的に助かる」といった意見があった一方で、「いろいろと手続きが面倒」「足助に移住する人は、どうやってこうした制度を知るのがか」といった意見もあった。

また、こうした重伝建制度を含めて、「自分が住んでいる町だけど、知らないことばかり」という意見が多く出たことを受けて、9月に開催した第6回目の実行委員会では、堀部支援員のガイドのもと、実行委員会メンバー自身が実際に「足助の町並み歩き」を行った。

実際に足助の町並みを歩いてみた委員からは、「家のつくりが1つ1つ違って、いままで気づかなかった所が多かった」「修理・修景をしたお家が素敵だった」「10年でもかなりの数の修理物件があるが、まだまだ修理が必要な建物が多いと思った」など、町並みを見る視点を変えてみることで、さまざまな気づきがあった。

これからも、足助の町並みの未来を考えるうえで、引き続き修理が必要な建物をなおしていく必要がある。その際には、この重伝建制度による修理修景事業がひとつの支援ツールとして役立つよう、制度をわかりやすく伝える工夫をしながら、町並みに対する理解をより一層深めていくことが求められる。



▲豊田市足助の「重伝建制度」について
(豊田市Webサイト)



動画はこちら

修理修景事業 事例②(左:BEFORE 修景前/ 右:AFTER 修景後)



- 葺き妻入り (さんがわらぶぎ つまいり)
- 漆喰塗籠 (しつくいぬりごめ)
- 霧除 (きりよけ)
- 虫籠窓 木製格子 (むしごまど もくせいこうし)
- 木製建具 (もくせいいたてぐ)

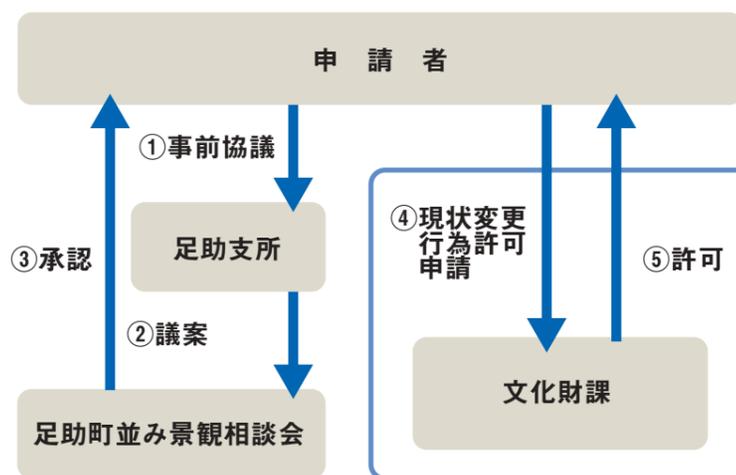
【重伝建エリア内の補助制度】

- ▶「修理」(建物をなおす)
〈補助率80% / 補助限度額5,000万円〉
…「伝統的建造物」の「修理・復旧基準」に基づく整備
…現状を維持、あるいは復原すること。
必要に応じて耐震補強なども行う。
- ▶「修景」(景観を整える)
〈補助率60% / 補助限度額500万円〉
…「伝統的建造物以外」

【「伝統的建造物」所有者の税制上の優遇措置】

- ▶家屋の固定資産税が「非課税」
…「伝統的建造物」に特定された家屋が対象
- ▶土地の固定資産税が「30%減額」
…「伝統的建造物」に特定された家屋の敷地の対象
※建物の水平投影面積で、軒の部分を除いた土地の面積(底地の面積)の税額が対象
- ▶家屋の相続税・贈与税が「30%控除」
…「伝統的建造物」に特定された家屋が対象

▼手続きの流れ(事前協議から現状変更行為許可まで)



まずは「足助町並み景観相談会」にご相談を！
重伝建の4町(西町、新町、本町、田町)及びその周辺の景観地区3町(宮町、松栄町、親王町)の7町内で町並みや景観を変える行為をする際には、事前に「足助町並み景観相談会」(以下、景観相談会)で協議を行うこととしている。
景観相談会で事前協議にかけられた案件は、市で定められた「景観形成基準」をふまえながら、地域住民・景観アドバイザー・建築士などで構成する委員らによって、意見交換が行われる。
この景観相談会で承認が得られた案件のうち、特に重伝建エリア内の案件は、さらに市に申請を行い、「現状変更行為許可」を受ける必要がある。許可の基準は、市で定められた「修理・復旧基準」及び「修景・許可基準」に基づき、判断がなされる。



第1回目の実行委員会議では「足助の良いところ」について意見を出し合ったうえで、3グループに分かれて「足助の良いところをもっと知ってもらいたい」という想いを伝えるためのキャッチコピーをつくるワークショップを行った。実行委員会メンバーが考える「足助の良いところ」としては、自然豊かで、歴史ある町並みがあることや、四季折々のイベント、そして人の良さや人との繋がりが濃密という点を中心に意見が集まった。

そんなメンバー間の和気あいあいとした会話の中から、グループごとに個性が際立つ、三者三様のキャッチコピーが生まれた。



▲変形バージョン(楡染 / 薄墨色 / 若緑 / 薄葡萄 / 今様色 / 唐茶)



▲足助中央商店街協同組合×椋山女学園大学「足助町並みさんぽ」(9~10月に計2回開催)

④ ロゴマーク

実行委員が考えたキャッチコピー3案と、「10周年」というテーマから着想を得て、それをさらに分かりやすく広めていくためのロゴマークを制作しようとして、複数の有志のクリエイターがデザイン案を実行委員会に提案した。実行委員会内にて投票を行った結果、最も投票数の多かった服部支援員が提案したデザイン案を、本事業のロゴマークとして正式に決定した。このロゴマークは、平入屋根と妻入屋根の町家が混在する足助の町並みの特徴をモチーフに、それらを一筆書きで繋げるようなイメージのデザインがされている。

決定したロゴマークは、使用ガイドラインの範囲内で誰でも使うことができるような環境を整えた。その結果、足助商工会や足助中央商店街共同組合などを中心に、足助の町並みで開催する各種イベントなどで活用され、本事業の周知にも寄与することとなった。それぞれに異なる団体の活動であっても、一つのロゴマークを旗印とすることで、少しずつ事業の輪が広がっていくような効果を生み出すことができた。



▲基本形バージョン(白地)



▲川村屋×椋山女学園大学「足助の釜カステラ」(11月の足助マルシェにて、数量限定販売)



▲足助中央商店街協同組合×柄澤照文「オリジナルピンバッジ」(2月の中馬のおひなさんスタンプラリーで、数量限定配布)



▲足助中央商店街協同組合×イベントSpoon「足助重伝建地区選定10周年記念 うちめぐりラリー」(LINEアカウントを使ったイベントを、11月に開催)

足助の良いところを「デザイン」する



⑤ キャッチコピー

令和3年度の1年間を通じて活動をしてきた実行委員会では、「足助の良いところ」をあらためて見つめなおし、「どうすればそれをより多くの人々に伝えられるか考えてきた。この取り組みの二環として、椋山女学園大学生生活環境デザイン学科4年生の堀田明来さんと服部ほの華さんの二人は、同大学の非常勤講師を務める堀部支援員とともに、デザインを使ったさまざまな制作物を提案し、実行委員の活動をサポートし続けてきた。

「あかりのつながる町」

人がいなければ町に魅力が出ないところをふまえ、住む人が増えればあかりが灯る家が連なっていくというイメージから生まれたキャッチコピー。

「__きになる足助」

楽しそうなことや面白そうなことをやって、地域の人たちがいきいき暮らす足助なら、足助以外の人もつつい気になってしまはず。そして、足助に来てくれた人たちを、こばまず、もてなし、足助を「すき」になってもらいたいというイメージから生まれたキャッチコピー。一文字目の「__」には様々な言葉を入れることができ、より一層、さまざまな足助の良さが表現できるようになっている(例、「すきになる足助」、「あきになる足助」など)。

「やい! おまん 足助 いいだら~! ほいだもんでこや~!」

「とりあえず足助に来てほしい!」という思いを、地元三河弁も交えながら勢いよく伝えようとして生まれたキャッチコピー。





① 自分の目線で足助の良さを伝えてみよう

足助の地域住民が伝えていきたいと願う「足助の良さ」

みでデザイン制作に携わった制作者の表情が見える1枚となつている。決定したポスターは、ロゴマークと同様、使用ガイドラインの範囲内で誰でも使うことのできるような環境が整えられている。制作されたポスターは、実行委員や支援員らを中心に、各々が気に入ったものを持ち帰り、店舗や住宅などの軒先に貼られ、足助の町並みにさらなる彩りを与えている。

や「次の10年後には、こういう足助にしていきたい」という想いは、支援員二人が学んできたデザインの力によって、より多くの人々に伝わりやすいものとなった。二人がデザインした数々の制作物は、足助の町並みの日常の中にあるモノやヒトに光を当ててくれた。このように視点や表現方法を変えるだけでも、何気ない風景が実はとても貴重なものだということに、気づくこともある。これからも、足助の町並みを訪れる人と暮らす人の双方が、それぞれの目線で足助の魅力表現してみよう。



② ポスター

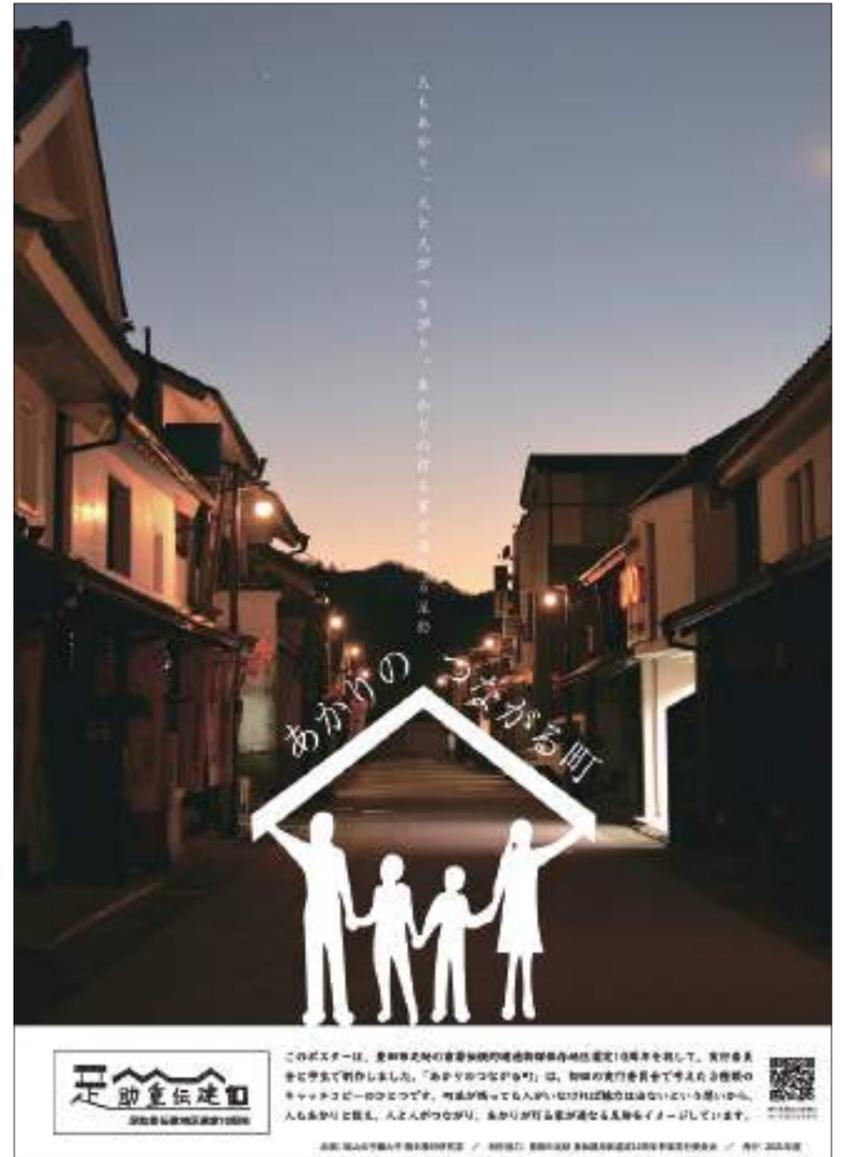
実行委員会の想いが込められた3つのキャッチコピーをさらに広めていくために、堀田支援員はキャッチコピーをつかったポスターをつくることを提案した。毎月行われる実行委員会に素案を示しながら適宜修正を加えていき、最終的に7つのポスターを制作した。

「あかりのつながる町」のポスターは、「町並みが残っても住む人がいなくては町の魅力は出ない」という実行委員会が出た意見から着想し、夕暮れ時の薄つすら明かりが灯りはじめる旧街道の田町銀座通りで撮影した写真を元にデザインを行った。

「「きになる足助」のポスターは、「」の部分に「あ」「す」

「と」「こ」を加えた4種類を制作した。それぞれのポスターでは、足助町外の学生の目線から、足助の町並み内にあるちよつと変わった「モノ」に着目して撮影を行った。足助の町並みで暮らす実行委員にも意外と知られていないモノもあるなど、いつもとは少し違った個性溢れる足助の町並みの風景を垣間見ることが出来る。

「やい!おまん 足助いいだろー! ほいだもんでこやー!」のポスターは、実行委員バージョンと支援員バージョンの2種類を制作した。実行委員バージョンは、4名の実行委員がそれぞれの家族らと一緒に写った写真を使用し、温かみのあるポスターとなっている。支援員バージョンは、堀田支援員と服部支援員が町歩きイベント「足助町並みさんぽ」でガイドを務めた際に撮影した写真を使用している。今回の取り組み



足助の良いところを「観光」にする

さまざまなローカルな話題に花が咲くなかで、特に鈴木支援員が興味をもったのが、「しすたあ美容院」を経営する井野口委員の語った芸者(芸子)さんの話だった。井野口委員の母親が美容院が開業した昭和31年頃、足助の町なかには芸者衆を抱える置屋がたくさんあったという。「芸子さんがお座敷に呼ばれる度に髪結いに来てくださるため、とても忙しい日々だったそうです。その後、私が生まれて物心つく頃には時代も変わり、芸子さん達はだんだん少なくなり、代わって花嫁さんのお支度の仕事が多くなってきました」と、井野口委員は話す。

他の委員も「芸子さんは、髪はお店で整えてもらうけど、化粧は自分で支度するみたいで。服をは

足助には芸者さんがいた?!

行った。実行委員会メンバーからは、一般的な観光案内には載っていない、地域住民だからこそ知っている魅力ある場所や思い出が語られた。こうしたアイデアの一部は、「とよたでつながるローカルメディア 緑側」の記事として情報発信も行っている。(P.24〜27参照)



だけさせながら、化粧をする芸子さんの姿がよく見られたそうです。「我々の世代は大変お世話になりました。(笑)」など、それぞれの世代が語る記憶を手がかりに、当時の光景を実行委員会メンバー全員で想像をしていく。この話をアイデアの源泉として、三河里旅で芸者さんの話をツアーにできないかと、足助の芸者さんについて、さらに詳しく調べていくこととなった。

足助最後の芸者さんに話を聞く

鈴木支援員は、ローカルツアーの企画調査を進めていくなかで、現在も足助に暮らしている元芸者さんの後藤久子さんに話を伺うことができた。詳しい取材の様子は「とよたでつながるローカルメディア 緑側」の記事として情報発信も行っている。(P.40〜43参照)

後藤さんからは、芸者さんとして働いていた頃によく



香嵐溪もみじまつりで足助音頭を披露する芸者さん



足助の良いところを「観光」にする

～ローカルツアーを企画する～



6月に開催した第3回目の実行委員会議では、鈴木孝典さんが新たに支援員に加わった。

広告デザイン業を営む傍ら、三河の山里でしか体験できないディープなローカルツアーを企画提案する旅行業「三河里旅」も立ち上げた。

この度、本事業と三河里旅が連携して、

足助の町並みをフィールドとした観光コースを企画することとなった。



「三河里旅」
Webサイトはこちら



足助は観光資源が豊富

三河里旅は、地域に詳しい方が「地域プレミアムガイド」としてツアー当日のガイドを務める。また、地域で子育て中の主婦などが「地域ツアースタッフ」なり、ツアー当日の補助を行うかたちで、観光ツアーを運営していく仕組みである。

「足助には、塩の道があったり商店街もあったりと、観光資源が沢山ある。コロナ禍になる前ではあるが、歴史を掘り下げた観光ツアーはヨーロッパの方からも好まれる傾向にあり、可能性を感じている。」と話す鈴木支援員。

実行委員会では、足助の町並みで紹介してみたいところや、自分の住む自宅付近の歴史や思い出について、話し合い、ローカルツアーを企画するうえでのアイデアを探すワークショップを



▲実行委員会が考える「足助の紹介してみたいところ」



令和3年度に足助の町並みで開催した三河里旅主催のローカルツアー「ちょっと贅沢で特別な御朱印旅」の様子。本事業実行委員会の田口会長も案内役を務めた。

通った道や料亭についてや、お座敷での作法についての話などを詳しく伺うことができた。また、特に鈴木支援員が興味をもったのは、「足助をどり」についてである。足助をどりは、その昔に足助の芸者さんがお座敷で舞っていた踊りに足助商工会青年部が着目し、盆踊りのようにみんなで輪になって踊れるようにアレンジを加えたものである。現在の足助の町並みには置屋も芸者さんも無くなってしまったが、「踊り」の文化は地域住民の力によって今もまだ存続し続けている。このように少しずつ準備を進めてきたこの企画は、新型コロナウイルス感染症のまん延防止などを考慮し、残念ながら令和3年度中のツアーの開催は見送ることとなった。一方で、未だに広くは知られていない数々の足助の観光資源が失われたわけではない。地域住民だからこそ知っている足助の良さをより広く伝えられるよう、引き続き、さまざまな工夫をしていく必要がある。(三河里旅の手がける芸子さんにちなんでローカルツアーは、令和4年度以降の開催を見据えて、引き続き構想中とのこと)



動画はこちら



動画はこちら

取材を通じて、あらためて足助の良さに気づく

今回、市民ライターに挑戦した3名の実行委員は、はじめて経験する苦労もあった一方で、足助の町並みで暮らす人々の温かさにあらためて気づく機会にもなったと語る。行政が発行する事業報告書で、地域住民が取材や原稿作成に関わることは珍しい。地域住民自らが行った取材だからこそ、取材を受ける側の地域住民の飾らない言葉や自然体の笑顔を自然と引き出すことができた。実際にこの町に暮らしているからこそ伝えられる真の足助の町並みの魅力をこれからも発信し続けていくことが、「この町で子育てをしてみたい」と思う世帯を増やしていくことにも繋がっていくだろう。

市民ライターをやってみて、気づいたことや感じたこと

奥村委員(足助町 田町)

初めてこのような経験をさせて頂きました。取材をするのも、それを文章にするのも初めてで、この年になって「ワード」の使い方を習うこともできました。

取材前から「多分そうだろう」とは思っていました。足助で生まれ育った人の「あすけ愛」の強さはなかなかで、それを足助の外から見ると「保守的」と思い違いされている部分があるかも知れない、とは思いました。とてもすてきなことなので、この後もずっと「足助が好き」でいて頂きたいです。

深見委員(足助町 松栄町)

ほぼ初対面の私を温かく受け入れてくださり、貴重なお話をたくさん聞かせていただきとても感謝しています。私自身、初めての経験でしたが、とても楽しい時間を過ごすことができ良い経験になりました。

取材をして2家族共に、ご主人の故郷を思う気持ち、足助愛の強さを感じました。消防やお祭り、地域ならではの役割など、仕事をしながら様々な役割をこなすことは大変だと思いますが、主体的に前向きに地域と関わる姿がとても素敵だと思いました。そして、そのことをよく理解し明るく支える奥さんの存在があることで、子ども達もお父さんを尊敬し、そのことが足助が好きになる姿に繋がっていることを感じました。

子ども達が地域の大人に見守られ、大切にされていることも感じられ嬉しかったです。とても可愛くて楽しい子ども達でした。大人になってもずっと足助に住み続けてほしいなと思います。

増田委員(足助町 西町)

取材した方々(奥様)は、みんな足助はちょうどいい、まったく不便じゃないと言っていました。住みやすい、子育てしやすい、近所の方々がやさしい、みんなで見守っている感じと…

この足助のよさ、魅力が伝わればいいなあ。そして子育て世帯が増えてくれるといいなあと思いました。



足助の良いところを「発信」する
記事を書いて、本を出す



7月に開催した第4回目の実行委員会議では、豊田市旭地区を拠点にライターとして活動している木浦幸加さんが支援員に加わった。豊田市の山村地域における持続可能な地域づくりを支援するおいでんさんそんなセンターで、「とよたでつながるローカルメディア 縁側」の編集長として、人・地域・自然がつながる生き方や暮らし方についての情報発信している。本事業とローカルメディア 縁側との連動記事プロジェクトについては、P.24、P.40を参照して欲しい。



「縁側」Webサイトはこちら



足助の町並みで暮らしてみたい
人を増やすための情報発信

この10周年事業の成果を二冊の報告書としてまとめようと思った際に、実行委員会としては単なる記念誌的なものではなく、1人でも多くの人に「足助の町並みに住んでみたい」「足助の町並みに住み続けていきたい」と思ってもらえようという内容の本をつくりたいと考えた。

足助の町並みで暮らしてみたい人を増やすには、まずは外から見て「いま、足助の町並みに住んでいる人自体が、魅力的に思えること」が必要である。そこで、現在足助で暮らしている方々のなかから、具体的な取材対象を考えていくワークショップを行った。30名ほど挙げられた候補者のなかから、最終的に現在子育て中の6世帯の取材を行うことを決めた。

地域住民がライターになる

子育て世帯の取材を行うにあたり、本事業の実行委員である奥村委員、深見委員、増田委員の3名が、取材先でのインタビューや取材後の原稿作成を行う「市

民ライター」に挑戦することとなった。3名は、木浦支援員が講師を務める「市民ライター講座」を受けた後に、約4か月間をかけて、初めてのライティングに取り組んだ。

足助の良さを伝えるための本づくり

こうした取材と同時併行して、本のレイアウトについても、毎月の実行委員会で話し合いを行いながら、徐々に方向性を決めていく作業を進めてきた。特に、本のイメージを大きく左右する「タイトル」と「表紙」については、慎重に議論を重ねてきた。

本のタイトルについては、市民ライター3人より提案のあった「やっぱり足助いいじゃん」という分かりやすく飾らない言葉にその他の実行委員も共鳴し、決定に至った。また、表紙については、複数のレイアウトデザインの中から、旧街道の背後に山頂の足助城が見える新町を撮影場所として、足助小学校6年生の子どもたちと実行委員会メンバーと一緒に写る写真が採用されることとなった。





この9年間の実践を通して、重伝建となった足助の町並みが、生活科の「まちたんけん」や社会科の「市の様子」や「昔の道具とくらし」に残したものの、伝えたいものといった単元や、道徳（郷土を愛する心を持つ）、総合学習（防災・景観・環境・歴史といったテーマ）など、たくさんこの学習課題（教材）になることがわかった。

「いまから重伝建の学習を始めます」
足助小学校の6年生が町並み学習を行うときは、日直がこう挨拶をして授業が始まる。教育課程としては総合的な学習の時間（以下「総合学習」）なので、一般的には「いまから、総合の学習を始めます」となるところだが、足助小学校ではいつからかこう挨拶している。全国的に見ても、小学校の授業名が「重伝建」となっているのは珍しい。足助の町並みが学区内にある足助小学校だからこそ、この町並み学習が大切にされていると感じている。

重伝建の町並みは「学び」になる！

足助小学校の2年生は、生活科の「まちたんけん」で、町並みの中でスタンプを集め、クイズの答えを探し、町の人に質問するなどして、まちを楽しみ、まちに親しむ活動をしている。

4年生は総合学習のテーマが防災であるため、火災や地震を中心に、昔の道具や建物の工夫を体験し、木造の建物が密集する町並みの課題や対策について学習する。また、4年生は毎年「小学生のぼうさい探検隊マップコンクール（日本損害保険協会他主催）」に応募しており、この学習で学んだこともその応募作品に活かされている。令和元年には、応募作品の一つが消防庁長官賞を受賞している。

6年生の総合学習のテーマは歴史であり、これまでにいくつかの学習プログラムを作成し実践してきた。令和元年度までは、歴史や町並み保存を学ぶ学習であったが、令和2年度からは、先生方からの「提案もさせたい」という意向を受けて、こどもたち自身が町並みの課題を見つめ、情報を集めて整理・分析し、課題解決のアイデアを出し合い、まとめ・発表する、といった探究的な学習にシフトしている。

足助の町並みが「学び」になる

～足助小学校が取り組んできた、足助の町並み学習～



重伝建に選定された足助の町並みを活用した学習は、平成25年度から始まり、令和3年度で9年目になる。足助小学校を中心に、足助中学校（中学3年生を対象）や土橋小学校（小学3年生の社会科の学習）で実践し、令和3年度は足助高等学校にも展開した。この9年間継続して、さらに学年を限定せず学校全体の学習として取り組んでいるのは足助小学校だけである。当初は全ての学年で実施していたが、他の学習や学校行事の時間確保などにより、現在は、2年生、4年生、6年生で行っている。



重伝建に選定されて…

足助の町並みが平成23年6月に重伝建に選定され、広く足助の町並みを知ってもらい、そして将来の町並み保存を担う地元児童生徒に、郷土の歴史や町並み保存に対する理解を深めてほしいという思いから、この学習は始まった。平成25年～27年度の3年間は、文化財課足助分室が名古屋市立大学芸術工学部鈴木賢二研究室に、足助の町並みを使った体験型ワークショップの運営を委託し、実践した。その3年間の成果は、『重伝建「足助の町並」を活用した学習ガイドブック』にまとめている。平成28年度以降は、文化財課が実施している「郷土学習スクールサポート」の取り組みの一環として、町並み学習を継続している。

どのように継続し、発展するか

この町並み学習は、学校や行政はもちろん、足助の町並みで暮らす地域住民の協力があったからこそ実践できる活動である。足助小学校では、毎年度の年間の学習スケジュールに組み込まれるまでに浸透した。年度のはじめに教務主任や学級担任と打合せを行い、各学年の実施日（予備日も含めて）を決めている。細かい内容については、直近に最低1回、場合によっては2回打合せして、当日を迎えることになっている。

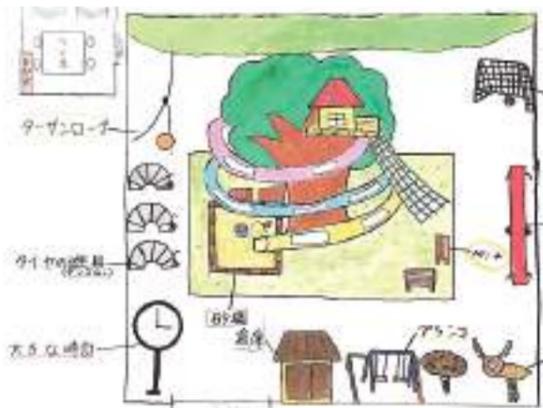
今後は、これまでの前例に捉われず、時代に合わせた学習課題の変化に対応して、デジタルツールなども活用しながら、より一層探究的な学習に発展していったほしい。そのために、学校、地域、行政と連携をしながら、足助の未来のために何が最良か、これからもこどもたちと共に考えていきたい。

ライター 堀部支援員（足助の町並み学習）講師



足助の町並みが「学び」になる

このコンセプトを軸として、豊かな自然や古い町並みを残しながら、子どもたちや若い子育て世代が住みやすく、移住しやすい町にしていくための、2つの遊び場(空き家・空き地の活用)と3つのイベントを提案した。



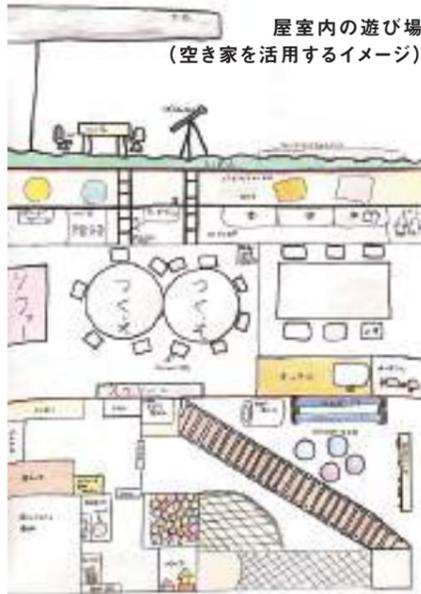
屋外の遊び場(空き地を公園化するイメージ)

遊び場の1つは、空き家を活用した屋内の遊び場である。1階にはアスレチックスペースがあり、空中アスレチック、ボルダリング、ボールプールなどで遊ぶことができ、2階にはみんなで勉強できるスペースや、みんなでご飯やお菓子を作って食べるができるキッチンがある。また、屋上にはキャンパススペースや天体観測用の望遠鏡がある。

今回の提案は、足助の大人たちの心を動かし、自然や文化に恵まれたまちで育つ足助の子どもたちは、たくさんさんの学習機会に恵まれている。こうした子どもたちの声を大切にするからこそ、これからのまちづくりには必要である。

「重伝建の学習」で、足助の子どもたちが伝えたかったこと

そして、重伝建選定から10周年となる令和3年度は、本事業とも連携して、足助小学校6年生が足助の町並みの未来に向けた提案を行うこととなった。



屋内の遊び場(空き家を活用するイメージ)

このコンセプトを軸として、豊かな自然や古い町並みを残しながら、子どもたちや若い子育て世代が住みやすく、移住しやすい町にしていくための、2つの遊び場(空き家・空き地の活用)と3つのイベントを提案した。

遊び場の1つは、空き家を活用した屋内の遊び場である。1階にはアスレチックスペースがあり、空中アスレチック、ボルダリング、ボールプールなどで遊ぶことができ、2階にはみんなで勉強できるスペースや、みんなでご飯やお菓子を作って食べるができるキッチンがある。また、屋上にはキャンパススペースや天体観測用の望遠鏡がある。

提案のための入念な下準備

足助の町並みへの提案を行うにあたり、6年生の子どもたちはかなりの時間をかけて事前学習を行った。縄文時代から続く足助の歴史を知るために、足助資料館、足助城、香風溪内の香積寺などを訪れて学んだ。また、多くの観光客が訪れる11月の香風溪で聞き取り調査を行い、足助の町並みを含めた周辺の観光地についてほとんど知られていないことを実際に確認した。

このような事前学習をベースに、「足助の良いところ・好きなところ・自慢したいところ」と「足助の気になるところ、もっとこうなると良いところ」について整理をしたうえで、より具体的なアイデアにつながるため、本事業の実行委員会でも活動する増田委員や堀部支援員と話し合う授業も設けられた。



子どもたちからは、足助の町並みにはたくさん良いところがあるものの、公園などの遊び場が少ないという意見があった。また、足助の町並みには空き家が多く、町が汚くみえたり危険であるため、空き家や空き地を活用して減らすことが必要なのではないかという意見があった。こうした意見は、本事業の実行委員会会議においても、同様の意見が出ていた内容でもある。

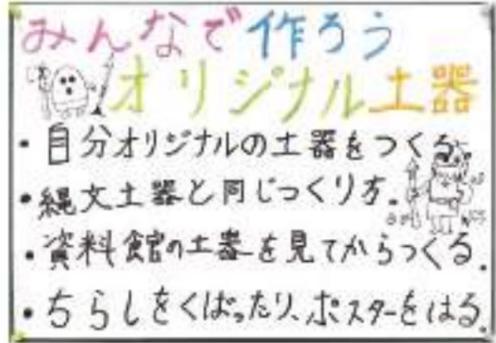
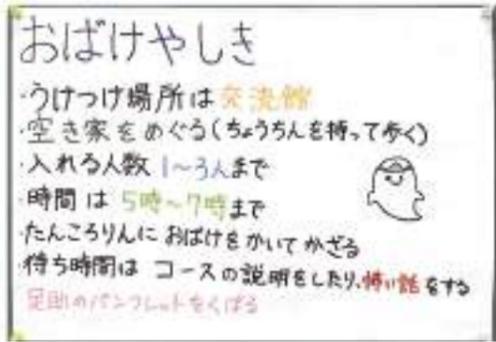
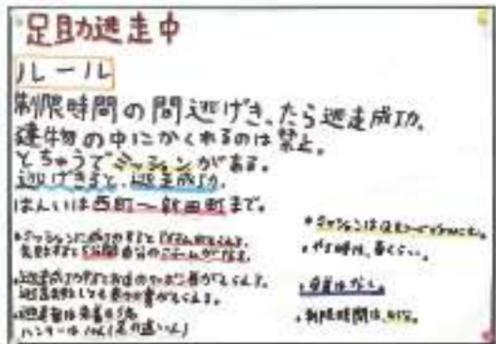
発表会は足助小学校初のオンラインで開催

毎年度、総合学習の成果を地域の大人たちに向けて発表する場を設けている足助小学校だが、令和3年度の発表会は、新型コロナウイルス感染症のまん延防止の観点から、急遽オンラインでの開催となった。足助小学校としては初めての試みとなったが、結果的に足助のまちづくりに関わる大人たちにと子どもたちの提案を届けることができた。



足助の子どもたちからの提案

子どもたちが考えた足助の町並みへの提案コンセプトは「昔ながらの雰囲気が残るにぎやかで住みやすい町 足助」。国の重伝建にも選定された町の昔の雰囲気を残しつつ、人口が減っている町を賑やかで住みやすい場所に変えていきたいという、足助の子どもたちの想いが込められたコンセプトである。



大人の頭を悩ませるいろいろな難しい課題に直面する。一方で、今回の取り組みを行ってくれた足助小学校6年生の足助の町並みを想う気持ちは、最も大切にすべきもののように思われる。子どもたちの発表は、以下の文章で締めくくられている。

足助の町を…
「足助の町らしさを残し、もっともっと住みやすい町にしたい」という想いを実現するために…
私たちがたくさん考えを出していきたいと思っています

足助の町並みを知り、地域の課題に向き合う ～実行委員が話しあってきたこと～



令和3年度の1年間を通じて、「重伝建」「空き家」「子ども」など、さまざまなテーマについて話しあってきた実行委員会。

1月に開催した第9回目の実行委員会では、これまでの会議で話しあってきたことをあらためて振り返りながら、フリートーク形式で自由な話し合いの場を設けた。

実行委員会の取り組みについて

「今まで当たり前だったことを客観的に見ることができ、新発見・再発見があった。次の世代に引き継ぎたい」、「教えなくてもらうことで足助の町並みに興味を持てた」、「最初に足助の町並みを見たときに凄いと感じたことを思い起こすことができた」など、今回の実行委員会の活動をきっかけとして知らなかった、あるいは身近にありすぎて当たり前のものだと思っていたことを見直す機会になったという意見が多くあった。

足助にはいままも男社会が根づいており、年長者だけで物事の方向性が決まり、なかなか若い人に話が伝わってこない側面もあるという。そうした背景もあって、今回の実行委員会の取り組みでは、比較的若い世代や、過半数以上を女性に実行委員を担ってもらえたことが、結果的に高く評価されているようだ。

また、「知らなかった方、関わったことがない方とお会いできてよかった」という声も複数出ていた。世代や住んでいるエリアによって、つながりの強弱の差もあるため、あえて重伝建エリア以外の周辺地域も含めた7町(西町、新町、本町、田町、宮町、松栄町、親王町)から入選をした今回の機会が、新たなつながりを生んだ側面もある。



足助の町並みの未来について

「空き家が活用されるよう、直しやすく、借りやすくすると良い」、「足助町時代に萩野地区と冷田地区に町営の賃貸住宅を建てた。若い人がステキだなと思う重伝建風な市営住宅を建てると良い」、「重伝建制度は面倒だという印象をなくすべき」など、これからの足助の町並みを考えていくうえでは、若い世代に住みたいと思ってもらえるような場所にしていかなくてはならないという意見が多くあった。

大人が勤める職場や、子どもが通う学校があることが必要な条件であるという話も出てきた。その点は、車通勤を許容すれば職場のある市街地へは比較的アクセスしやすい立地であることや、学校についても自然豊かな場所です少人数学級の教育が受けられることなどの魅力も挙げられた。

また、重伝建エリアとなっている足助の町並みでは、厳しい景観基準が住む際のハードルとなっているのではという意見もあった一方で、それを逆手に取れないかといった前向きな提案もあった。

「伝統的建造物(特定物件)でない場合には、条例にみあう設計を行えば、既存家屋を建て替えることができるというのには知らなかった」、「うちは全部壊して建て替えました」、「うちも新築です」、「結構、町の人も知らないことが多い」などのやりとりもあった。重伝建制度は一定の基準を満たせば金銭面でも多額の補助が受けられるという他のエリアにはないメリットもあるため、もっと多くの人に正しい情報が伝わるよう工夫していく必要があるということも、行政にとっても住民にとっても、大きな気づきであったように思われる。



「祭り」や「踊り」について

今回の一連の活動であらためて強く認識した、「祭り」や「踊り」への地域住民の強い思い。特に男性の実行委員からは、足助町外に住んでいた時期も、祭りや地元消防団の練習のために、週末には足助に戻ってきたという話がよく出てくる。

一方、女性の実行委員からは、商工会青年部が夏に開催する「足助をどり」で、香風深音頭、足助音頭、綾波おどりを踊ったが、凄く楽しかったという話題も出ていた。昨年は新型コロナウイルス感染症のまん延防止措置などの影響で開催できなかったが、足助の町並みに合うし、子どもたちも高齢者も楽しめるので「今年は絶対にやる」という意気込みも聞かれた。

こうした祭りや踊りをはじめとした「足助を好きでいる要素」を、これからも維持し続けていくことが、これからも足助の町並みを守っていくためには、必要なことなのかもしれない。



「足助LOVE(愛)」な人が多いと実感

「会議に来ると、毎回、足助の話で盛り上がる。みんな、本当に足助が好き」、「豊田市に合併しても、出身は足助だと誇りを持って言う」、「足助LOVEな親だったら、子どもたちも引き継ぐ」、「うちの子たちは一度出たが帰ってきた。何か惹かれるものがあるのだろう」など、足助が好きという人が多いことを実感したという意見があった。都市部から嫁いで来た委員からは、生まれたところには、特に誇れるものがなかったもので、うらやましいという話も出ていた。



田口敏男 会長



委員の皆さん、1年間お疲れさま。よくやってくれた。皆さん1年かけて関わってみると、いろいろと思うことがあったはず。「いい」と思ったことは継続し、「んん、ちょっとこれは…」と思ったことは変革することが必要。これからも足助の町並みであり続けるには、守るべきものは守りつつ、時代とともに勇気をもって変えていくことも大事だと思う。これからの変革の時代の方が、これまでよりも苦勞が多い。それを肝に銘じてがんばっていきましょう。

プロフィール

【現住所】豊田市(足助町外)
【出身地】足助町(本町)
【職業等】「豊田市足助観光協会」

浅井美由紀 委員

これまで商売屋さんや宮町の方などしかお付き合いがなかったけれど、この実行委員会は、お会いしたことのない方々と知り合えた良い機会だった。「足助なんて大嫌い」という友人に、この会で話し合ったことを見せてあげたら、どんな反応をするか知りたくなった。

時代が変われば、人も変わる。来るお客さんの気持ちも変わる。香嵐溪と町並み、「あつちはどうだ」「そっちはどうだ」ではなく、同じ「足助」だから、お互いに協力し合って盛り上げていきたいと思う。

プロフィール

【現住所】足助町(宮町)
【出身地】豊川市
【職業等】旅館「香嵐亭」



平野雅人 委員

最初、この実行委員会が何を目標にし、何をしていたら良いのかわからなかった。でも、委員を引き受けてくれたメンバーが、足助のまちづくり、足助の町並みに興味と理解を持ってくれたこと、それは素晴らしい成果だと思う。

これまでの足助の会議の場には女性がほとんどいなかった。これからは、女性をもっと話し合いの場に参加し、一緒にまちづくりを考えることが大事だと思う。何といっても、女性が足助を好きでいてくれないと、家族みんなで足助に暮らし続けるのは難しいから。

プロフィール

【現住所】豊田市(足助町外)
【出身地】足助町(田町)
【職業等】建設資材会社勤務



佐久間洋和 委員

いつもと違うメンバーで、まちのことを話すことができたこの実行委員会に参加して、楽しかった。行政がやるといつも何か成果を残さないといけない感じだけど、今回のように自由に話をする場が大事だし、ざっくばらんに話をするだけでも十分だと思う。

今後は、1つのテーマで2〜3回くらい集まって、参加者を変えて話をしてみるのも面白いと思う。公募するのもいいし、無作為に選んで参加してもらってもいいんじゃないかな。ただ知らないだけで、知ると興味を持つ人はいると思う。これまでまちに関わることが少なかった人たちにとっても、良いきっかけになるかもしれない。

プロフィール

【現住所】足助町(本町)
【出身地】足助町(本町)
【職業等】和菓子屋「足助両口屋」



浅井弥永 委員

義父(前足助商工会長の故・浅井恒和氏)がまちづくりの活動をさせていたのを耳にしたことはあるくらいで、まったくといっていいほど知りませんでした。今回、実行委員会に参加して、初めてお会いする人とも知り合えて、町の知らないことも知れてよかったです。この機会があれば、これからもまちに関わることはなかったかもしれません。

町並みが美しくなることは気持ちが良いと思うし、いま住んでいる人たちが安心して楽しく住めるまちづくりができれば、きっと町は活性化すると思います。

プロフィール

【現住所】足助町(親王町)
【出身地】名古屋市長古屋市
【職業等】「浅井行政書士事務所」



プロフィール

【現住所】足助町(新町)
【出身地】足助町(新町)
【職業等】「うなぎ店「川安」

川島めぐみ 委員
これまで、足助に暮らしていても、足助のまちづくりについて考えることはなかった。今回、実行委員会に参加して足助の町並みを歩く機会もあったが、こどものころから育ってきた町なのに、知らない場所ばかりで驚いた。足助の歴史にも興味をもったし、関わっていくなかで、いろいろなことを吸収したいとも思った。
こどもたちのためにも、より住みやすい町になるように、そして足助を好きでいてもらえるようなまちづくりを、この活動をきっかけに学び考えていきたい。





三宅孝明 委員

この実行委員会に参加して、これまで当たり前だったことを客観的に見ると、こんなに自分の住む町って良かったんだなという再発見ができた。重伝建制度の説明を聞いた時、まち歩きをしていくなかで、重伝建の良いところもあり、改善するところもあると思った。足助に住む人間として、重伝建をもっと知るべきだし、知りたいと思った。そして、より一層足助に興味があった。自分のように、町並みのことを知ること、ここに暮らす人々が、町並みに関する知識や興味が高まるといい。子どもたちが大人になったとき、地元足助を誇れるよう、足助を知って、好きになるきっかけをつくってあげたい。次の世代に引き継いでもらいたいという思いが高まった。

プロフィール

【現住所】足助町(新町)
【出身地】足助町(新町)
【職業等】自動車販売整備会社 勤務



奥村ひろみ 委員

足助の良さを伝えるには、まずは、自分たちがまちづくりもイベントも楽しむことが大事だと思う。そうすれば、足助の外の人にも気になる。「なにになに？」と興味をもたず、この実行委員会の活動で、足助の良さを伝えるポスターやロゴマークができたことは成果だと思う。

足助は人のつながりがすごく大事だし、いいと思う人が住み続けている。足助に住むことを迷っている人には、その良さをアピールできた方がいい。そして、「あきらめモード」を払しょくし、空き家を活用して、住む家があればいいと思う。暮らしやすいさと観光地としての魅力を併せもった町並みができたらと。地元では「当たり前」の風景。でも、他のところから多くの人々が訪れるほど素敵などころ。それを子どもたちに伝えたい。

プロフィール

【現住所】足助町(田町)
【出身地】豊田市(足助町外)
【職業等】「アパレル」※「都市」に出店

深見和奈 委員

足助に長く住んでいるが、まちのことは知らないことばかりだった。また、知る機会もなかった。この実行委員会に参加して、これまで何となく見てきた風景がいろいろな人の努力で残ってきたことを初めて知った。いろいろな方とお会いし、知り合うきっかけにもなり、そういった意味でも良い機会だった。

実行委員会ですべてできたことが報告書やポスターなどのカタチに残ることは嬉しく思う。

プロフィール

【現住所】足助町(松栄町)
【出身地】豊田市(足助町外)
【職業等】保育師



横地良和 委員

実行委員会に参加して、委員のみんなと足助の話をした。みんなと町並みを歩いて新しい発見をしたり、取材を受けて自分の思いを振り返ったり、小学生の町並み学習の話を聞いたりした。そしていつの間にか、子どもに足助を好きになつてもらいたいと思う自分がいた。これからは、子どもファーストの足助になればいいと思う。

そして、まちづくりには男ばかりではなく、こういった話し合いの場に女性や若者が参加できるようにして、意見を聞くことが大事だと思う。

プロフィール

【現住所】足助町(西町)
【出身地】足助町(西町)
【職業等】建設会社 勤務



井野口純子 委員

これまでずっと足助に暮らしていて、町並みや香嵐溪の景色が当たり前になってきた。この実行委員会に参加していろいろ教えてもらって町並みをみてみると、いまになってやっと足助に興味が出てきた。「足助をどり」をやることは大変だけど、自分たちも楽しんでやって、新しい魅力になったらいい。きっと、子どもも若い人も年寄りも元気になれる。そして、重伝建の町並みで踊ることが「いい」って評価されて、踊り好きな人が踊りにくるようになったらいいと思う。

プロフィール

【現住所】足助町(本町)
【出身地】足助町(本町)
【職業等】「しすたあ美容院」



増田比呂子 委員

実行委員会でまち歩きをしてみて、初めて知ったことばかりだった。他の住民の方や特にお嫁に来た方にも町並みを散策する機会があれば、町のことや重伝建のことをもっと知ってもらえると思う。この会に参加してみても、みなさん足助が本当に好きなんだと感じる。子どもにも、「足助が出身」って誇りをもっていつてくれるようになると思う。

大人として、子どもたちの意見や思いを大切にしたいし、子どもたちの願いを叶えてあげたい。10年先、20年先、人口が減らず、子どもたちがたくさんいる町になつてほしいと心から思う。

プロフィール

【現住所】足助町(西町)
【出身地】豊田市(足助町外)
【職業等】「金原生花」



足助の町並みの歴史

足助の町並みは、尾張・三河と信州を結ぶ伊那街道（中馬街道塩の道）の重要な中継地として、様々な物資の運搬や人々の往来で栄えた商家町である。重要な交易品であった塩はここで詰め替えられ、「足助直し」「足助塩」と呼ばれ、馬の背に載せて信州へと運ばれた。

安永4年（1775）の大火で、足助川右岸の田町から新町までのほとんどが焼失してしまった。大火直後から町は再建され、現在まで続く町並みの基礎が築かれた。明治20～30年代、物資の運搬方法が人や馬の背から馬車に移り変わっていった。伊那街道の道幅が狭いため改修が必要となり、新町と田町の山側を切り開いて道が通された。明治44年（1911）に国鉄中央線（現JR中央線）が全線開通すると、流通の拠点としての機能は衰退したが、



▲「足助村絵図」安永大火前の町並み（1707～1728年頃）

東加茂郡の政治、経済、文化の中心地であり続けた。大正12年（1923）頃から巴川の両岸に遊歩道が整備され、昭和初期に地元青年団などが飯盛山にモミジを植樹した。この帯が昭和5年（1930）に「香嵐溪」と命名され、東海地方随一の紅葉の名所となると、足助の町並みも賑わった。

また、明治以降は、林産物（薪、木炭、竹材など）の売買が盛んになり、足助の林業は大きく発展した。昭和20～30年代の戦後復興期には、名古屋など大都市に近く、林業も盛んだった足助が目玉され、人口が増加した。昭和40年以降、日本は高度経済成長が続き、町並みの周辺地域では自動車関連企業へ働きに行く人が増え、町並みの生業も変わっていった。



▲観音山から見た町並み（昭和初期）

足助の町並みの保存と活用のあゆみ

- 昭和50年度 有志30人で「足助の町並みを守る会」発足
- 昭和51年度 「足助町並調査概報」発行
- 昭和52年度 「足助の町並み」三州足助の町並み」発行
- 昭和53年度 第1回全国町並みゼミ開催（名古屋市長と共催）
- 昭和55年度 住民の自主的な規制による町並み保存を決める
- 昭和57年度 昭和52年から保存に取り組み、足助中馬館が開館
- 平成5年度 「足助まちづくりの会」発足
- 平成6年度 「足助の街づくりに関する要綱」「足助の街づくり規範」制定
- 平成6～16年度 「街なみ環境整備事業」により住宅等の修景を実施
- 平成10年度 「中馬のおひなさん」始まる
- 平成14年度 「たんころりん」始まる
- 平成17年度 「足助まちづくり推進協議会」発足
- 平成20年度 「伝統的建造物群保存地区制度推進部会」発足
- 平成21～25年度 「まちづくり交付金事業」により電線地中化などを実施
- 平成22年度 豊田市伝統的建造物群保存地区保存条例制定
- 平成23年度 「足助伝統的建造物群保存地区保存計画策定」発行
- 平成23年度 豊田市足助伝統的建造物群保存地区保存計画策定
- 平成23年度 「足助伝建かわら版」創刊
- 平成23年度 豊田市伝統的建造物群保存地区補助金交付要綱施行
- 平成24年度 国の重要伝統的建造物群保存地区に選定（6月20日）
- 平成24年度 「足助まちづくりプラン」策定
- 平成24年度 「足助伝建ガイドライン」発行
- 平成25年度 旧鈴木家住宅が国の重要文化財に指定（8月7日）
- 平成25年度 「足助の町並み学習」開始
- 平成25年度 重要文化財旧鈴木家住宅保存修理工事開始
- 平成26年度 足助町並みサポーター募集・活動開始
- 平成27年度 足助まちづくり推進協議会が都市景観大賞景観づくり活動部優秀賞受賞
- 平成28年度 「重伝建「足助の町並」を活用した学習ガイドブック」発行
- 平成28年度 「豊田市足助伝統的建造物群保存地区防災計画報告書」発行
- 平成29年度 「旧鈴木家住宅保存整備基本構想」策定
- 平成29年度 「足助をどり」始まる
- 平成29年度 「足助町家情報ネットワークあきびと座」発足
- 平成29年度 町並み消火器設置、足助交流館駐車場に耐震性貯水槽を設置
- 平成29年度 「足助検定」始まる
- 令和元年年度 初期消火器具「街かどハリアー」設置
- 令和2年度 足助陣屋跡地に防災倉庫兼公衆トイレ及び耐震性貯水槽を設置
- 令和3年度 豊田市足助「重伝建地区選定10周年事業」実施



▲「足助をどり」（平成29年度～）



▲「第1回全国町並みゼミ」（昭和53年）



▲『町並み会報』（昭和52年）

重伝建地区選定10周年事業

- 【調査】
- ▼「伝統的建造物現況調査（160棟）」（令和3年4月28日～令和4年1月31日）
- 【企画イベント】
- ▼「重伝建地区選定10周年事業 キックオフイベント」@田田口家住宅（令和3年6月20日）
- ▼「足助の町並み伝建選定10周年記念ご朱印めぐり」（令和3年6月20日）
- ▼企画展「あつまれじょうもの土器」@足助中馬館ほか足助の町並み13箇所（まちなか展示）（令和3年10月23日～12月8日）
- ▼博物館フィールド講座「あつまれじょうもの土器」（令和3年11月20日）
- ▼足助重伝建地区選定10周年中馬塾「足助町並みさんぽ」@相山女学園大学の学生による体験型ガイドツアー」（令和3年9月23日、10月30日）
- ▼「あすのまちなか記憶あつめるプロジェクト」（令和3年9月24日～令和4年3月16日）
- ▼「昭和30年頃の足助の町並み図屏風展」@田田口家住宅（令和3年10月8日～12月8日）



▲「昭和30年頃の足助の町並み図屏風展」では、
当時は懐かしむ人々の話に花が咲いた

- ▼「#高校生が小学生の学びと観光プランをプロデュース」（令和3年10月29日）
- ▼足助町並みサポーター展示 @足助中馬館（令和3年9月24日～）
- ▼足助重伝建地区選定10周年記念うちめぐりラリー」（令和3年11月1日～11月30日）
- ▼博物館オンライン講座「紙屋鈴木家の茶会記を読む」（令和3年11月13日、令和4年2月12日、3月5日）
- ▼「足助マルシェ」@新田町駐車場（毎月第3日曜日）
- ▼「足助の釜カステラ」販売（令和3年11月21日）
- ▼博物館フィールド講座「拓本あつめるプロジェクト in 足助」（令和3年12月18日）
- ▼「中馬のおひなさん in 足助」
- ▼「中馬のおひなさん 足助商店街スタンラリー」（令和4年2月11日～3月13日）
- ▼「足助に誘う案内猫と不思議な謎解き町歩き」（令和4年2月19日、3月12日）
- ▼「第4回足助検定」中馬のおひなさんめぐり」（令和4年2月26日、2月27日）
- 【広報メディア】
- ▼「豊田市政番組」とよたNOW」特集
- ▼「重要伝統的建造物群保存地区選定10周年 足助の町並み」（令和3年6月21日～放送）
- ▼「広報とよた」2021年6月号（令和3年8月1日発行）
- ▼「広報とよた」2021年6月号（令和3年8月1日発行）
- ▼「豊田市郷土資料館だより」111号（令和3年9月16日発行）
- ▼「足助の町並みが、重伝建地区選定から10年を迎えました!!」
- ▼「足助とつながる情報誌あすけ通信」38号（令和3年11月1日発行）
- ▼「中日新聞三河版「MY KAWASACHI」
- ▼足助・重伝建10周年事業実行委「幅広い世代が知恵を」
- （令和3年11月8日発行）



6 【物件名】中澤家住宅(田町)[伝統的建造物:田-66]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理修景(平成25~26年度事業)
 【建物用途】住宅 [明治30年 建造 / 元 米・豆腐屋、駄菓子・パン屋]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】(有)鈴木建築

8 【物件名】都築家住宅(本町)[伝統的建造物:本-52]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成25~26年度事業)
 【建物用途】住宅 [昭和9年 建造 / 元 金物屋]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】安藤建築(室口町)

10 【物件名】本町郷蔵(本町)[伝統的建造物:本-51]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成26年度事業)
 【建物用途】収蔵庫
 【建物仕様】妻入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】(有)鳥居材木店

12 【物件名】井筒亀精肉店(田町)[伝統的建造物:田-2]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成26年度事業)
 【建物用途】店舗 [安政5年 建造 / 牛馬・野獣肉商]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】秋山建築設計事務所 / 【施工者】(株)河本材木店

5 【物件名】杉浦家住宅(田町)[伝統的建造物:田-22]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成25年度事業)
 【建物用途】住宅(離れ座敷) [大正~昭和初期頃 建造 / 元 料理旅館]
 【建物仕様】妻入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】大河原建築

7 【物件名】中澤家住宅(田町)[伝統的建造物:田-32]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成25年度事業)
 【建物用途】店舗兼住宅 [文化元年 建造 / 元 馬宿、現 陶器屋]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】(有)松井住宅

9 【物件名】地藏堂(本町)[伝統的建造物:本-25]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成26年度事業)
 【建物用途】仏堂、庫裏 [宝暦6年 建造]
 【建物仕様】妻入り平屋建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】安藤建築(室口町)

11 【物件名】本多家住宅(田町)[伝統的建造物以外]

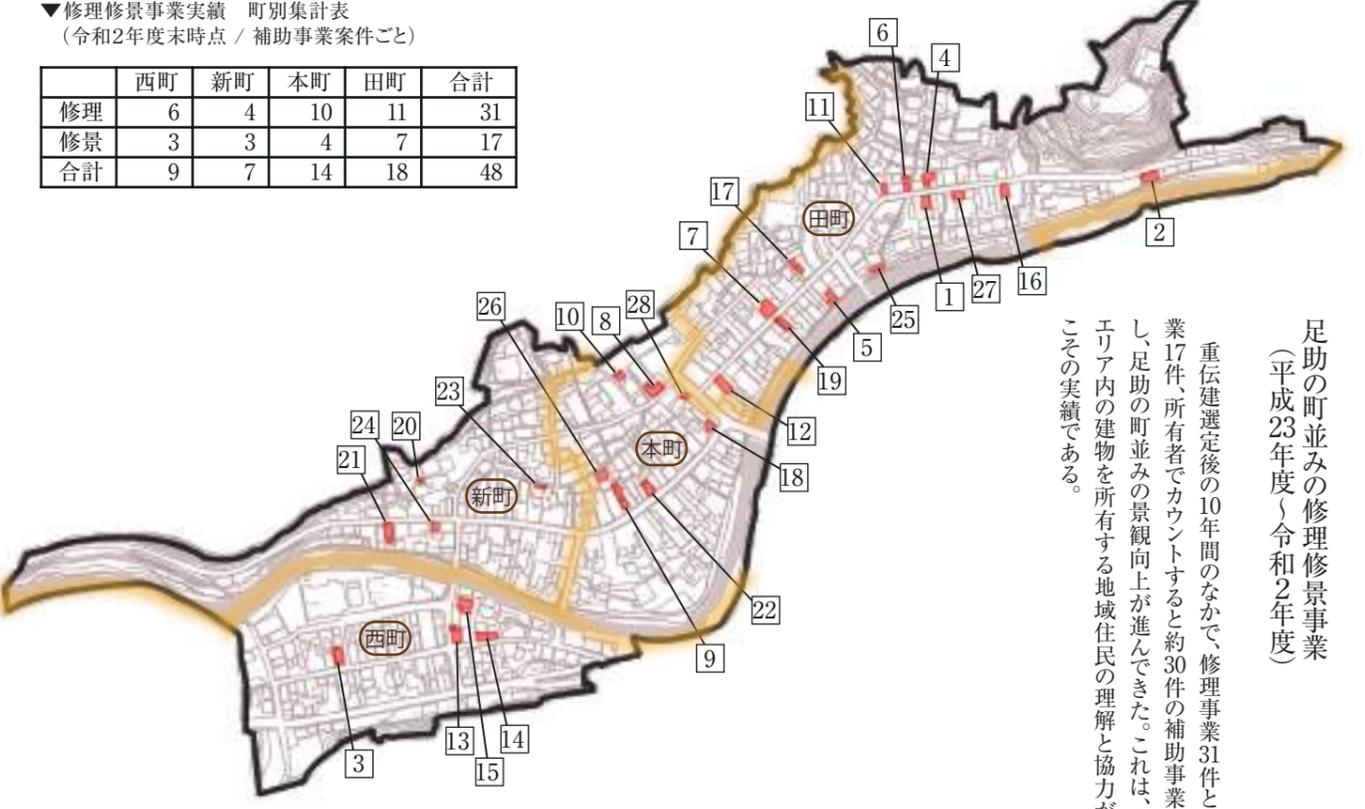


【外観写真(修景前 ▶ 修景後)】

【修理区分】修景(平成26年度事業)
 【建物用途】住宅 [元 家具屋]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】(株)小林清文建築設計室 / 【施工者】(有)鈴木建築

▼修理修景事業実績 町別集計表
 (令和2年度末時点 / 補助事業案件ごと)

	西町	新町	本町	田町	合計
修理	6	4	10	11	31
修景	3	3	4	7	17
合計	9	7	14	18	48



▲修理修景事業実績マップ(令和2年度末時点)

重伝建選定後の10年間のなかで、修理事業31件と修景事業17件、所有者でカウントすると約30件の補助事業を実施し、足助の町並みの景観向上が進んできた。これは、重伝建エリア内の建物を所有する地域住民の理解と協力があってこその実績である。

足助の町並みの修理修景事業
 (平成23年度~令和2年度)

2 【物件名】松井家住宅(田町)[伝統的建造物:田-62]



【外観写真(修理修景前 ▶ 修理修景後)】

【修理区分】修理修景(平成24年度事業)
 【建物用途】住宅 [明治後期頃 建造 / 元 馬具・雑貨屋]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】(株)小松

4 【物件名】服部家住宅(田町)[伝統的建造物以外]



【外観写真(修景前 ▶ 修景後)】

【修理区分】修景(平成24年度事業)
 【建物用途】住宅、門塀 [昭和8年 建造 / 元 呉服・雑貨屋]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】大河原建築

1 【物件名】奥村家住宅(田町)[伝統的建造物以外]



【外観写真(修景前 ▶ 修景後)】

【修理区分】修景(平成24年度事業)
 【建物用途】住宅 [新築 / 元 時計・眼鏡屋]
 【建物仕様】妻入り2階建て
 【設計者】(株)小林清文建築設計室 / 【施工者】(有)鈴木建築

3 【物件名】澤田家住宅(西町)[伝統的建造物以外]



【外観写真(修景前 ▶ 修景後)】

【修理区分】修景(平成24年度事業)
 【建物用途】住宅 [新築]
 【建物仕様】平入り2階建て
 【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】(株)岡山建築工房

22 【物件名】真野家住宅(本町)[伝統的建造物:本-57]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理修景(平成29~30年度事業)
【建物用途】住宅 [江戸後期頃 建造 / 元 床屋、家具屋]
【建物仕様】妻入り2階建て
【設計者】塚本建築設計事務所 / 【施工者】安藤建築(室口町)

21 【物件名】山田家住宅(新町)[伝統的建造物:新-8]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成28~29年度事業)
【建物用途】住宅 [大正10年 建造 / 元 旅館屋]
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】(有)鈴木建築

14 【物件名】中根家住宅(西町)[伝統的建造物:西-30]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成26~27年度事業)
【建物用途】住宅 [明治以前頃 建造 / 元 タバコ・うどん・豆腐屋]
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】アトリエ祥建築設計 / 【施工者】(有)鳥居材木店

13 【物件名】柘植家住宅(西町)[伝統的建造物:西-24]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理修景(平成26、28年度事業)
【建物用途】住宅 [大正4年 建造]
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】大林建築設計事務所 / 【施工者】加藤建築

24 【物件名】岩田家住宅(新町)[伝統的建造物:新-11]



【外観写真(修理修景前 ▶ 修理修景後)】

【修理区分】修理修景(平成29年度事業)
【建物用途】住宅 [明治20年代頃 建造 / 元 酒屋、菓子・雑貨屋等]、門塀
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】アトリエ祥建築設計 / 【施工者】三州伊勢神建築

23 【物件名】三宅家住宅(新町)[伝統的建造物以外]



【外観写真(修景前 ▶ 修景後)】

【修理区分】修景(平成29年度事業)
【建物用途】塀 [新築]
【建物仕様】—
【設計者】ほろくす一級建築士事務所 / 【施工者】安藤建築(西椋尾町)

16 【物件名】中野家住宅(田町)[伝統的建造物:田-55]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成27年度事業)
【建物用途】住宅 [明治35~36年頃 建造 / 鍛冶屋]
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】佐々木勝敏建築設計事務所 / 【施工者】東海ハウス(株)

15 【物件名】横地家住宅(西町)[伝統的建造物:西-27]



【外観写真(修理修景前 ▶ 修理修景後)】

【修理区分】修理修景(平成26~27年度事業)
【建物用途】住宅 [文化2年 建造(移築)]、塀
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】塚本建築設計事務所 / 【施工者】安藤建築(室口町)

26 【物件名】寿家(本町)[伝統的建造物:本-46]



【外観写真(修理修景前 ▶ 修理修景後)】

【修理区分】修理修景(平成元~2年度事業)
【建物用途】事務所等 [大正13年 建造 / 元 料亭]
【建物仕様】入母屋3階建て
【設計者】塚本建築設計事務所 / 【施工者】(有)縦山技建

25 【物件名】矢澤家住宅(田町)[伝統的建造物以外]



【外観写真(修景前 ▶ 修景後)】

【修理区分】修景(令和元年度事業)
【建物用途】塀
【建物仕様】—
【設計者】(有)鳥居材木店一級建築士事務所 / 【施工者】(株)ほろくす

18 【物件名】都屋(本町)[伝統的建造物:本-44]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成28年度事業)
【建物用途】店舗 [文化元年 建造]
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】落合建築デザイン商店 / 【施工者】安藤建築(室口町)

17 【物件名】板倉家住宅(田町)[伝統的建造物:田-36、37]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成27年度事業)
【建物用途】住宅、倉庫
【建物仕様】妻入り2階建て
【設計者】(有)林技建 秀設計室 / 【施工者】(有)鳥居材木店

28 【物件名】高木家住宅(本町)[伝統的建造物:本-48]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(令和2年度事業)
【建物用途】住居 [元 自転車屋]
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】アトリエ祥建築設計 / 【施工者】(有)松井住宅

27 【物件名】鈴木家住宅(田町)[伝統的建造物:田-51、52]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(令和元~2年度事業)
【建物用途】店舗兼住宅 [明治32年 建造 / 元 蚕種製造、現 印刷屋]
【建物仕様】平入り2階建て
【設計者】アトリエ祥建築設計 / 【施工者】(有)鈴木建築

20 【物件名】普光寺 円通閣(新町)[伝統的建造物:新-42]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成28年度事業)
【建物用途】仏堂 [天保5年 建造]
【建物仕様】入母屋平屋建て
【設計者】アトリエ空 / 【施工者】(株)中村社寺

19 【物件名】岡本家住宅(田町)[伝統的建造物:田-14]



【外観写真(修理前 ▶ 修理後)】

【修理区分】修理(平成28~29年度事業)
【建物用途】住宅 [江戸後期頃 建造 / 元 塩問屋]
【建物仕様】妻入り2階建て
【設計者】(株)魚津建築設計事務所 / 【施工者】(株)魚津社寺工務店

調査結果から、早急に対応が必要なD判定の伝統的建造物は19棟あった。また、C判定の伝統的建造物は、放置すればすぐにD判定の状態に移行する可能性が高く、修理費用の負担増を抑えるためにも、腐朽が比較的軽微なうちに対策を進めていく必要がある。

D判定の伝統的建造物のうち、住居(店舗含む)は9棟で、うち6棟は建物の使用が確認できず、おそらく空き家状態であると思われる。その他、土蔵や倉庫は6棟、祠などは4棟であった。また、C判定の伝統的建造物のうち、住居(店舗含む)は18棟で、使用が確認できない空き家状態と思われる建物は7棟あった。その他、土蔵6棟、離れ7棟、祠などは4棟あった。

▼伝統的建造物現況調査結果(町別集計表)

	西町	新町	本町	田町	合計
A	8	10	10	4	32
B	11	13	5	44	73
C	3	14	8	9	34
D	5	5	4	5	19
不明	-	2	-	-	2
合計	27	44	27	62	160

【凡例】A:健全 B:近い将来補修が必要
C:腐朽が始まっており補修が必要
D:緊急を要する補修がある

対象物件:伝統的建造物160棟
調査員:あいちヘリテージマネージャー
(文化財建造物の専門的知識を有する建築士)
調査方法:目視による外観調査を基本とし、文化財建造物の劣化状況等を4段階に分類して状況を判断。
調査期間:令和3年4月~令和4年1月
(現地調査は令和3年7~8月に実施)

重伝建選定からちょうど10年目を迎える令和3年を節目として、伝統的建造物全214棟のうち、保存修理工事中の紙屋旧鈴木家住宅及び修理済みの伝統的建造物を除いた160棟について、現況調査を実施した。

足助の町並みの伝統的建造物の現状

22

【物件名】真野家住宅(本町)[伝統的建造物:本-57]



【外観写真(修理前▶修理後)】



▲波打ちゆがんだ屋根



▲瓦のズレ



▲植物の浸食

調査結果から多く見受けられる腐朽状況として、屋根部分では屋根瓦の歪み、ズレ、落下、またそれら不具合に伴う雨漏りなどがあつた。外壁部分では雨樋の詰まりや腐朽、または漆喰や板壁の剥離により、土壁が直接風雨に晒されてしまい、建物の下地や構造部が露出した状態のまま放置されてしまっている建物もあつた。さらに、蕨などの植物が屋根や外壁を覆い、雨漏りの原因になっていると想定されるケースも少なくない。

屋根や外壁の劣化は、放置すれば将来的には建物の崩落にも繋がりがかねないため、特に早急な対策が望まれる。これ以上建物の傷みをひどくしないための応急処置と、本格的な修理事業に繋げていくための準備を、伝統的建造物所有者、地域、行政が適宜連携をしながら、同時並行で進めていく必要がある。

また、今回B判定であった伝統的建造物も、9棟の住居が空き家状態であることがわかった。A判定も含めた全調査対象160棟のうち、住居は94棟、空き家は22棟で、腐朽の激しい伝統的建造物ほど空き家状態となっている割合が高くなる傾向が見られた。

重伝建選定後の10年間のなかで、修理修景事業によって、30棟もの伝統的建造物及び工作物が、健全な状態へと生まれ変わった。また、いまだ修理事業に着手していない伝統的建造物においても、定期的に傷んだ部材の修理を行ったり、軽微な掃除などを含めて適正な手入れが行われてきた建物は、傷みを未然に防ぐことができ、結果としてA判定の調査結果となっている。

これからの10年を見据えて、それぞれの伝統的建造物所有者には、既の実施済の修理事業の事例を参考としながら、引き続き適正な建物の維持管理と、今後の修理計画の検討を進めてほしい。



▲外壁漆喰や板壁等が剥離し下地や躯体が露出した状態



▲雨樋の機能不全から生じた壁面の崩落



▲瓦の劣化から生じた雨漏りとその後の壁面崩落や腐朽など

伝統的建造物の修理の方法

これまでの足助の町並み内で実施してきた修理事業のなかでも、文化庁の参考修理事例にも挙げられた真野家住宅(平成29~30年度事業)を例に、伝統的建造物の具体的な修理の過程をここでは紹介する。

建物の歴史性を考えた復原を大切にしている伝統的建造物の修理では、まず事前の資料調査や、足助まちづくり景観相談会での事前協議、また補助事業化するための申請資料の作成などを綿密に行う必要がある。真野家住宅においても、実際に修理工事に着手する約1年前から、建物の昔の様子を知るための調査や設計方針の検討に時間をかけてきた。

真野家住宅の場合、古写真や棟札などの資料があまり残っていないこともあり、修理工事着手後の解体工事を進めながら、既存建物の痕跡を調べて、改造の有無を探ることとなった。真野家住宅の建物は、元々は髪結い(床屋)で、昭和36年から平成12年までは家具屋を営んでいたとされている。街道沿いの建具の痕跡を調べたところ、昭和36年以前の床屋だった時代の痕跡が完全には残っていないことから、家具屋だった時代の淡緑色の建具を復原する方針をとることとなった。



▲痕跡確認(旧建具色)



▲建物内観(修理工事前)



▲痕跡確認(改造の有無)



▲建物内観(修理工事中)



▲2階採光窓



▲建物内観(修理工事後)



▲梁の腐朽状況(修理工事中)



▲敷地裏側



▲敷地裏側(設備機器等の設置)



▲木工の様子(修理工事中)

築50年以上の歴史をもつ伝統的建造物の修理では、解体工事着手後に初めて建物の腐朽状況を確認できるようにすることが多い。真野家住宅でも、当初の想定以上に土台、柱、梁などの腐朽が進行していたために、工事着手後に2回の変更手続きを行うこととなった。そのため、適宜修理方針の変更が生じうることを想定した計画とする必要がある。

2か年にわたる修理工事を行った真野家住宅は、街道から望見できない部分に採光窓をつくり、各種設備機器を設置するなど、補助対象外の範囲にも工夫を施して、快適な住環境づくりに成功している。そして、街道側には昭和の時代から足助の住民にとっては馴染みのある真野家具店の佇まいが、再び足助の町並みに復活した。



高木伸泰 支援員／あすけ通信

あすけ通信編集委員という立場から、実行委員会の活動の記録をお手伝いしてきました。重伝建には、これまで関わる事がなかったことで良い機会になりました。たくさん写真を撮り、文章を書きました。本冊子が足助の町並みの活力アップにつながることを期待します。



鈴木悠太 支援員／あすけ通信

今回実行委員に携わらせていただき、コラムを書かせていただきました。少しでも多くの人に重伝建の魅力が伝われば幸いです。今後20年、30年、50年とこの景観が守られ、その魅力や歴史が、途切れることなく、後世に伝わっていくことを願っています。



堀田明来 支援員 & 服部ほの華 支援員／

椋山女学園大学 生活環境デザイン学科
橋本雅好研究室(2022年3月卒)

今年度10周年事業に携わらせていただき、足助の良さを改めて再確認することができたなと思いました。毎回会議に参加させていただくにつれ、皆さんの足助愛を感じることができ、地元を誇りに思えることが羨ましいなと感じました。



ロゴについては私たちからもアイデアを出し、実行委員会の皆さんに選んでいただき、とても嬉しかったです。実行委員会で考えられた3つのキャッチコピーを、足助の方々に協力していただき、良さをデザインとして表現したポスターを作ることができました。ポスターやロゴを通じて足助を多くの方に知っていただけるきっかけとなれば嬉しいなと考えています。



木浦幸加 支援員／

とよたでつながるローカルメディア 縁側
[(一社)おいでん・さんそん 運営]

旭地区に暮らし、仕事で足助地区に通って何年か経ちますが、足助の町並みについて勉強する機会がありませんでした。今回関わらせていただき、インタビューをしたり、原稿を確認したりする中で、賑わっていた昭和初期の頃の様子、現在暮らす皆さんの足助への溢れる想いを知ることができました。人々が受け渡し続けてきた景色が変わらず残っていくことを願います。



鈴木孝典 支援員／三河里旅

僕は同じ豊田市小原地区に住んでいます。デザイン業という仕事柄、足助に商売人の知り合いが何人いるのですが、みなさん商売っ気はもちろん、団結力があって元気でパワフルだなと感じていました。今回の重伝建の冊子のお手伝いをさせていただくことで、足助の歴史的ななごりや行事やお祭り、地元愛の秘密が垣間見られた気がしました。重伝建は生活面で大変な面もありますが、観光の観点からは資源が豊富で歴史も詰まったほんと魅力的な町だなと改めて感じました。



岡本宏之 支援員／

伝統的建造物群保存地区保存会(伝建保存会)

足助の町並みは、国が認めた住民の宝です。我々は選定10年を振り返り、そして学び、賑やかな町として次の世代に継承したいと思っています。今回の10周年メンバーは、今までのメンバーの足助遺伝子と足助に根付いた史伝子(※注)のメンバーが新たな感覚で展開したと感じています。委員の皆様、スタッフの方々のパワーを感じました。この町に関わって頂いた大学生の方々にも感謝です。これからは、これを期に住民一丸となって「新しい時代に向かう古い町」として船出できたらと思います。

(※注)史伝子:町づくりの世界で良く使われる。代々住み続けている人(遺伝子)の対比語。魅力を感じて移住してきた人(1ターン)がその地に住み続け、やがて遺伝子へと変わっていく、町づくりの新しい血。



堀部篤樹 支援員／「足助の町並み学習」講師

回を重ねる毎に実行委員の個性が見え、関係も築け、楽しく進行することができました。足助で育った方、嫁いで来られた方、みなさん足助のことが大好きで、ほんと良いところですね。次は、将来のまちづくりの担い手であることにもっとかかわってほしい。



廣瀬友門 支援員／足助商工会 青年部

伝建自体の周知や、問題の洗い出しのための良い取り組みでした。ここに住みたい!住んでいて良かった!と思える町を、今いる人たち一人ひとりが自分事と捉えて町を作って行って欲しい。



青山茂 支援員／伝建かわら版編集委員会

町並みを維持するには、現在より進んだ新しいことをしなければ維持できないので、住みたい人や観光客が増えるよう、新しい手法で人を呼び込むことが大切。美しい町並みで育った子は、情緒豊かで健やかに育つと思うので、そこをうまくPRしていきたい。



山田哲 支援員／足助町並み景観相談会

今回、新しいメンバーが実行委員として、足助のまちづくりについて考えてくれたことは大きな成果だと思う。自分がこれからやっていきたいこととしては、祭りの受け皿をどうやって広げ、情報発信していくかというところ。ゆくゆくは、祭りやイベントだけでなく、普段も足助に来てくれるようにしていきたい。



足助いいじゃん!

～あかりのつながる 足助の町並みと暮らし～

豊田市足助重伝建地区選定10周年事業報告書

発行／豊田市 令和4年6月

編集／豊田市生涯活躍部文化財課足助分室

〒444-2424 愛知県豊田市足助町宮ノ後26-1

Tel. (0565) 62-0609

重伝建地区選定10周年事業実行委員会

(一社)おいでん・さんそん

●本誌掲載記事の無断転載を固く禁じます





足助 いいじゃん!

～あかりのつながる 足助の町並みと暮らし～



電子書籍はこちら

『やっぱ足助いいじゃん!』は、
スマートフォンやパソコンなどでも読むことができます。
足助の町並みと暮らしに興味がある方に、ぜひご紹介ください。

発行: 豊田市